



創作クラスタお茶部  
部誌 2012 冬





創作クラスタお茶部  
部誌 2012 冬





無事お茶都市に到着しました！  
お茶の香りが島いっぱい広がっていて、さすが  
世界で一番お茶の集まる島!!  
お世話になる店にも挨拶をしてきました。住み込  
みですが休みももらえるみたいなので、街を回っ  
てみたり、色んな経験をしたいと思います。  
お茶都市のこと、手紙に書きます。  
みんなによろしく。

この冊子は、創作クラスタお茶部の部員による  
「都市とお茶」をテーマにした一冊です。

<http://nanos.jp/twiocha/>

目次

最期の茶会 .....	4	Ag
メモリアルブレンドティー .....	18	トダ姉
Cifrado Libro Apocalipsis ~ Oswald ~ .....	22	雪本 歩
美術館の至宝 .....	36	nicco
亡き王妃のためのティーセット .....	44	椎名恵
黒の迷子と望郷の鏡 .....	56	さいふあ
Cifrado Libro Apocalipsis ~ Aref ~ .....	70	雪本 歩
墓守り人 .....	82	高里潤
青い花と緑の鳥 .....	88	木元ユウ
紅茶図書館 .....	100	伊佐雄
ミルク .....	108	沙ク
星の舟 .....	116	椎乃みやこ
ファミリー .....	128	鳴加
BAR .....	144	白象正雪
音味 .....	148	神奈崎 アスカ
十字の香 .....	160	吟子 あゆる
グッバイ、ブルーパード .....	174	天都しずる
奥付 .....	190	



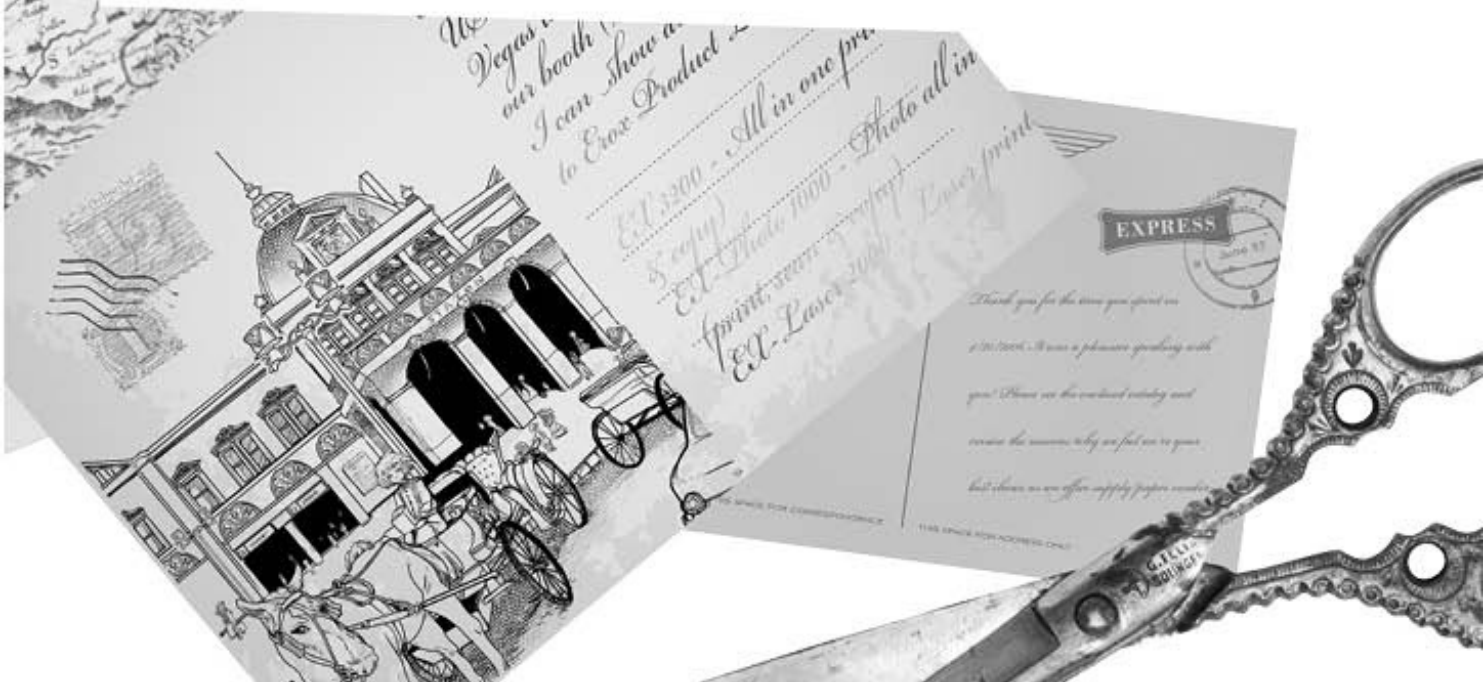
みんな元気にはってますか。  
僕は少しホームシックになったみたいです。

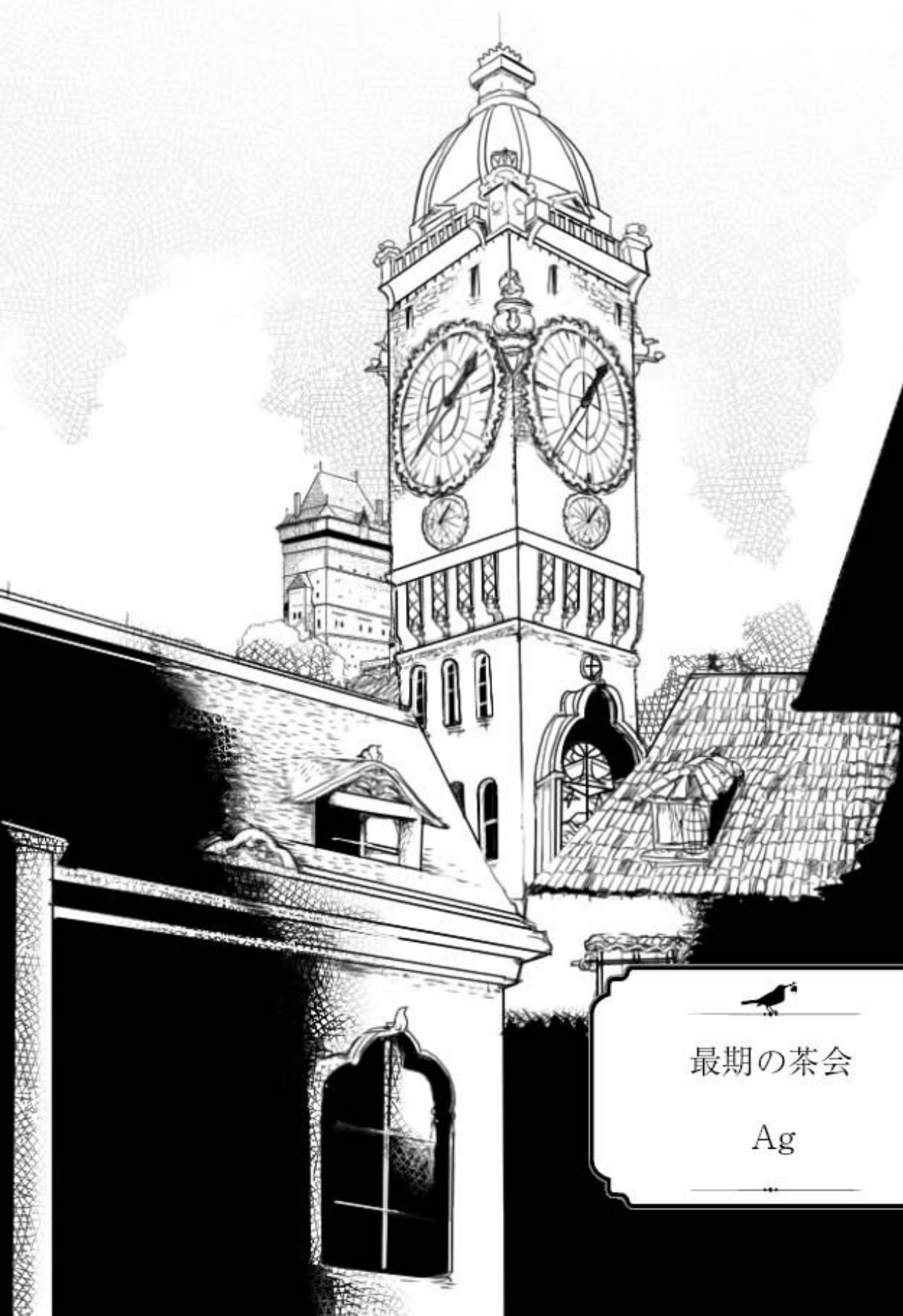


まだ友達もできないし仕事はきついけど  
店に戻った時のためにも、がんばります。  
街のシンボルの時計塔のポストカードを同封します。

親方が「本当に仕事も何もかも嫌になったら、時計塔裏口に回って、こ  
れから言うことをやってみろ」って脅すんです。

何でもこの時計塔には怖い噂があって、しかも魔女が住んでいるって噂な  
んですよ。





最期の茶会

Ag

五機目の飛行機が離陸するのを見届けて、彼は椅子から立ち上がる。ビジネスマンや旅行客が行きかう空港で、彼は酷く浮いていた。草臥れた大学生のような服装から仕事の香りはしないし、かといって旅行客特有の非現実には浮かれている様子も見当たらない。おまけに彼の荷物は斜めがけのカバン一つとあまりに少なく、まるで百二十円の切符と航空券を間違えてここまで来てしまったかのようだ。実際、彼は旅行客でもビジネスマンでもなかった。彼は死ぬために日本から飛行機を乗り継いでこの街まで来たのだ。

空港を出たところでタクシーを拾い時計塔までと伝えると、運転手がにやりと笑う。

「あの時計塔は実は自殺の名所でね、今でも結構多いんですよ」  
「はあ」

それが目当てで来たと言えば面倒くさいことになるだろうから適当な相槌を打って、彼は窓の外に目をやった。玩具みたいな色の街並みの中で時計塔はひとつだけ背が高い。立派な鐘を頭に乘せた大きな時計は三時過ぎを指していた。運転手は続ける。

「しかもね、あの時計塔には魔女がいるんです」

面倒くさい運転手にあたってしまった。とんでもない方向に向かう話を聞きながら、彼はゆっくり目を閉じる。

近くで見ると時計塔は思っていたより大きく見えた。一見シンプルに見えるが、時計塔の煉瓦は大きさの違うものが混ざっていたり斜めに組み合わされていたりと、さり気ない工夫が散りばめられている。はるか上にある時計を見上げて彼は思わずため息をつく。海の近い、絵の具で塗りつぶしたような青い空に赤い煉瓦がよく映えていた。写真で見たときはこんなところで死のうなんて考えられないと思ったが、こんなところだからこそ死んでもいいと思えるのかもしれない。

彼はインターネットで読んだマニユアルを思い出す。正面の入り口は時計塔の歴史を記す博物館に繋がっているが、彼が目指すのはそこではない。時計塔内部に続く、本来はメンテナンス用に作られたであろう裏の入り口だ。博物館へ向かう人々の列を抜け、裏に回った彼は古びた木造の扉を見つける。その先は関係者しか入ることができない場所だから、もちろん鍵がかけられている。マニユアル



通り鍵がかかっていることを確認した彼は、その扉をノックする。コンコンコン、コンコンコン、コンコンコン。マニュアルに載っていた叩き方は三回を一セットとして三セット、それから深呼吸してからゆっくり三回。コン、コン、コン。おとぎ話じゃあるまいし、と最初は思ったが掲示板の書き込みなどを見る限り本当にこれで扉は開くらしかった。最後の一回を叩いた彼は一步下がって扉が開くのを待つ。

しばらく待つと、奥で錠を外す音が聞こえた。ギシギシと音をさせながら、重そうなその扉が少しだけ開く。

「要件は？」

扉の隙間から顔を出して尋ねたのは、十五くらいの少女だった。ウエーブのかかったプラチナブロンドの髪は腰ぐらいまであり、透けるような白い肌は人形のように。青いワンピースがよく似合う美少女だ。

「死ぬために」

あまりにも少女が美しかったので見とれそうになった彼だが、何とかその問いには正しく答えた。その答えを聞くと、少女は扉を開き彼を時計塔の内部へ招き

入れる。

「そう。じゃあ上がって」

そして少女は時計塔の壁に沿って天井近くまで続く螺旋階段を指さした。

規則正しい歯車の音が煉瓦の壁に響いて気が狂いそうだ。段数は百を超えたところで数えるのをやめてしまった。先ほどから脹脛が悲鳴をあげている。どこまで続くのだろうと彼が不安になってきたころ、唐突に階段の終わりは訪れた。急に視界が明るくなったと顔を上げれば、ガラス製の文字盤から太陽の光が差し込んでいた。薄く濁ったガラスに影を落とす巨大な針は三時四五分を指している。

「貴方も死にたいのね」

光が差し込んでいる西の文字盤の反対側、東の文字盤の方から声がする。声の方に目をやると、文字盤に人影が二つとテーブルの影が浮かんでいる。太陽は西にあるが、まだ外の方が明るいため逆光となつてよく見えない。

「もし時間があるなら死ぬ前に少しお話しませんか？」

夢のような心地で彼は頷く。

階段の終わりから続く通路はぐるりと三面に沿って伸びていた。西の文字盤のわきを通り、北の壁面に沿った通路まで来るとようやく二人の顔が見えてくる。驚くことに、一人は入口で彼を招き入れた少女だった。彼は彼女を残して階段を昇り始めたはずだし、追い抜かれた記憶もない。それなのに、少女は彼の先にいる。

「幽霊でも見た？」

少女が笑う。

「あまりからかうもんじゃないわ」

そう言ったのは落ち着いた女性で、長いストレートの黒髪を一つにくくり、真っ黒のロングドレスを着ている。美人ではあるが、妖しさや毒も併せ持つ女性だった。彼は直感する。きっと彼女が魔女だ。

「そちらにおかけになって」

そう言いながら魔女は奥の椅子に腰かける。少女は慣れた様子で手前の椅子を引き、彼を座らせる。間にある円形のテーブルは時計の文字盤を模していた。

「最期の茶会をいたしましょう」

魔女がそう言うと、少女がワゴンで色とりどりの容器を運んでくる。それらはみな、時計塔の鐘の形だ。

「その鐘を一時から十二時まで順番に並べるの。一時が貴方の生まれた瞬間、十二時が今この瞬間を表しているから、昔の思い出から順番にその思い出に合う鐘を並べて頂戴」

言われた通り彼はあまり幸福ではなかった人生を思い出しながら鐘を並べる。必然的にテーブルの上は暗い色の鐘で埋め尽くされていった。彼が鐘を並べ終えるのと同じタイミングで時計塔の鐘が四時を告げる。

「時計を見る手間が省けたわ」

魔女はそう言ってテーブルの真ん中にティーポットを置き、注ぎ口を四時の位置に合わせる。いつの間に温めたのか、ポットからは既に湯気が上がっていた。

「さあ、始めましょう」

並べられた鐘は上部を回すと外れ、中には茶葉が入れられている。すべての鐘の蓋を外すと、魔女はそれぞれから茶葉を一つまみ中央のポットに入れていく。一時二時三時、五時六時七時、九時十時十一時。そして一呼吸おいてからゆっく

り四時と八時と十二時をそれぞれ二つまみ入れる。それは入口でのノックと同じリズムであった。

「ルル」

魔女が声をかけると、少女はどこからか持ってきた薬缶でポットに湯を注ぐ。青臭いような、甘ったるいような香りが時計塔の内部に広がる。それはお世辞にもいい香りとは言えず、彼は思わず顔をしかめた。そんな彼のことなど気にせず、魔女は真つ白な磁器のカップにそのお茶を注ぎ一口飲んだ。

「まあまあ苦労したみたいね」

カップを置きながら魔女が言った。

「一番辛かったのは中学の頃の虐めかしら。それとも、彼女にお金を持ち逃げされたこと？ いろいろ不幸はあったみたいだけど、なんだか日本って人間関係が面倒なところね」

彼は思わず目を見開いた。魔女が告げたのは間違いなく自分の人生だ。

「驚いた？ これは貴方の過去のお茶。私はこれで貴方の過去を見るのよ。貴方も最期に飲んでみたら？」

そう言って魔女が別のカップにお茶を注げば、少女がそれを運んで彼の前に置く。色は綺麗な琥珀色をしているが、先ほどの香りから想像してもこれまでの人生から想像しても、どちらにしても酷い味しか浮かばない。二度ほど迷ってから、彼は恐る恐るカップに口を付けた。

そのお茶は予想していたよりは随分マシな味がした。あんなに酷い香りをさせていたとは思えないほど落ち着いた味わいである。しかしそれはあくまでも予想していたものと比較しての話である。自然と眉間にしわが寄るほど渋いそれは決して美味しいとは言えそうになかった。

「渋いですね」

「貴方の過去だもの」

「そうですね」

この渋くて美味しくないお茶が自分の人生にはふさわしい。そんなことを考えて彼は独り苦笑する。

「やっぱり美味しくないわね」

「ええ」

「でも、悪くないかも」

魔女がそう言って、彼は驚いた顔で魔女を見つめた。

「ルル、いらっしやい」

呼ばれて魔女の横までやってきた少女はよく熟れたオレンジを一つ持っていた。

「あら、彼はオレンジ？ 合うのかしら」

そう言いながら魔女はどこからともなくナイフを出すとオレンジを半分に切り、スクイザーでそれを絞る。少女は魔女からスクイザーを受け取ると、その果汁を全て彼のカップに流し込んだ。

「その子は未来を見るのよ」

魔女が言う。

「そのお茶は貴方の未来。飲んで御覧なさい？」

魔法がかけられたのではないかと彼は思った。オレンジの味に混ざって、先ほどは洪みの後ろに隠れていた豊かな紅茶の味が広がる。香りも爽やかで、青い空が恋しくなった。

「未練がないならカップごとそのお茶を捨てて飛び降りなさい」

魔女がそう言った時には既に、彼はお茶を飲み干してしまっていた。

「魔女が手品なんてやめなよね」

カップを洗いながらルルが言う。

「彼に飲ませたの、カメリア茶園にお願いしたやつでしょ？」

「そうよ。ストレートだとあまり美味しくないけど、フルーツを入れるとすごく美味しいお茶。そうだ、残りのオレンジでルルにも淹れてあげるわ」

「わーい」

自分用のカップを温めはじめたルルを見ながら、時計塔の魔女、アリーはテーブルの下からポットを取り出す。本物の彼の過去はその中だ。

「ねえ、本物ってどんな味だったの？」

温まったカップを持ってやってきたルルがポットの中身を覗き込む。

「飲んでみる？」



アリーは自分のカップに残ったお茶をルルに差し出す。一口飲んだルルは顔  
いっばいに不満を浮かべた。

「何これ、雑草みたいな味がする」

「そうね、酷い味よ。はい、口直しにどうぞ」

アリーが紅茶を渡すとルルは嬉しそうにオレンジを絞る。



「本当に酷い味」

カップに残ったお茶はルルが言うとおりに雑草のような味がした。

「でも、どうしても捨てられないのよね」

換気用の小さな窓から覗き見た、名前も知らぬ日本人の後姿は少しだけ背筋が  
伸びたようにも見える。





休みの日に裏路地に入ってみたら、表通りより親しみ  
ある店がいっぱいありました。

ティースプーン専門店、ティーハニー専門店、魔法香辛  
料専門店。他にもたくさん!

今のお気に入りには"裏路地カフェ" 屋台ですごい、いい雰囲気なんだ。  
女の子に会って、ちょっと話をしました。

はじめて同年代の子と話をした気がします! すごいカワイイ子なんだ。この話は  
また。

P.S 仕事はなんとか覚えてきたけど、まだ慣れなくてたまにへこたれます。





RESTAURANT



メモリアルブレンドティー

トダ姉

裏路地カフェの

メモリアル・ブレンドティー  
旅の思い出茶

春になるとやってくる

不思議な旅人・ハルさん。

1年かけて集めた異国の茶葉を、  
とつてもおいしく淹れてくれるの。

ハルさんの裏路地カフェでは、

誰でもお茶が飲めるのよ。

おとなも子どもも、お金持ちも貧乏も。

そう、誰でもね！







この都市にあるオルター城には、今は住んでいる領主様はいないとか。

昔はこの国の王様がいたこともあるとか、他王侯貴族が使っていた時期もあるとか聞きました。

色々な貴族に使われてきたみたいです。

何代か前の城主のオズワルド様はいわゆる「貴人」だけに「奇人」だったとか。貴族って分からないですけど、お茶の味だけは誰にでも平等だって僕は思います。



post card





Cifrado Libro Apocalipsis

~ Oswald ~

雪本 歩



お茶葉の交易が飛び交うこの街で、その事件はまるで注がれたミルクのように、ゆっくり静かに浸透してきた。

——隣国の茶葉商人の突然死。

その国では別名「紅茶富豪」という威名すら手に入れた商人の死は、取引をしていたオズワルドの耳にも伝えられた。

なにせ取り扱う外国茶のおよそ四十パーセントがその商人からの卸だ、他にも多くの取引先はあるがその数値は決して小さくない。すぐに手は打ったため損害はなかったが、今後のルートに関しても検討し直さねばならず、しばらくまた書類や数値と日々を過ごさねばならないだろう。

祖父の時代から引き継がれる事業だ、オズワルドとして仕事は嫌いじゃない。

それでもこの退屈で、ある種単調な日々には辟易はしていた。本当に求めるものは他にある。

——書物に埋もれた偽りの歴史。

——そこに隠れる多くの真実。

——そして渦巻く人の陰謀。

表は嗜好品を主に扱う貴族商人。だが裏では学者か探偵か、区別の付かぬ知的探求をするのがオズワルドの趣味とも言えた。

オズワルドⅡファウラーという人間は、街の古本屋店主たるアーレフに言わせれば極めて「変人」なのだそうだ。わざわざ危険の香りを手招き、なおかつ自ら足を運ぶのだから変人でなければ狂ってる——とも言っていただろうか。

ともかくその話がオズワルドの元に転がり込んできた時、彼は常に浮かべるアルカイツクスマイルの裏で、誰にも見せない愉悦を浮かべていた。

個人的にも親しかった紅茶商人の婦人はオズワルドを頼り訪れ、主人の死の真相解明を彼に託した。

「承知しました。そうですね、報酬は専売ルート譲渡で」

穏やかな笑みを浮かべる彼の思惑に気づくことなく、婦人は二つ返事で快諾したのだ。

それがほんの二日前。

そして今日は、あいにくの雨だった。

街を囲む美しいセルリアンブルーの海は曇り、古い石畳が広がる街中から人が消える。海に迫り出した都市ゆえに对岸沿いは特に危険だからと、警察から立ち入りの禁止が出された。

オルター城は街の中でも一際高い丘の上に築城されていたが、その背後は断崖で、荒れ狂う海が広がっている。波が城を襲わんとその断崖へと体を打ちつけては空しく散っていった。

窓に打ち付ける雨音を聞きながら、城主たるオズワルドは届いた書類に目を通していった。

赤みがかかった髪は額にかかる箇所だけ後ろに撫で付けている。後ろ髪は意外と短くさっぱりしているが、耳にかかるサイドは頬にかかるほど長い。切れ長の琥珀色の瞳で、右に片眼鏡モノクルをつけている。白い糸で記号化された蔦や花の刺繍があしらわれた濃紺の貴族服を着飾り、緋色のビロードが貼られたクラシカルな猫足椅子に座る姿は実に優雅だ。齢は二十前半か中ほど、整った顔立ちは意外にも彫りが深い。しかし外見の年齢よりも随分と落ち着いた雰囲気醸し出してた。

街の古本屋の主たるアーレフからの書類と一冊の本は、先日オズワルドが頼んでいたものだ。

書類の方はハーブの種類、効能、危険性が羅列されたいたって簡素なもの。五枚だけの書類をあつという間に読み終え、オズワルドはその中から二枚を抜き出し、飴色に輝く机に置いた。

「オズワルド様、本日のご予定は」

空になったティーカップに新たな紅茶を注ぎ入れながら執事——グスタフが尋ねる。

小柄な東洋系の顔立ちをした老人でダークグリーンの瞳をしていた、齢は五十半ばだろう。白く短い髪を主と同じく後ろへ撫で付け、同じ色のヒゲは綺麗に切り揃えている。艶やかな光沢を放つ黒い燕尾は彼にしっくりと馴染み、似合っていた。

オズワルドは今度は本を手元に引き寄せる。薄く微笑を浮かべながら、彼はグスタフが新しく入れた紅茶を満足げに見た。

「この天気だ、雨に濡れるのは好きじゃない。外にはいかないよ」

「左様でございますか」

「ああでも、来客の準備はしておいてくれ。特に熱い紅茶はいつでも出せるように」  
主の言葉にグスタフが不思議そうに片眉を動かす。

「そんな大層な客ではないと思うよ。鳥の知らせだ」

「虫の知らせ、ではありませんか？」

「間違いではないな、でも虫は本の方が好きだろう？ ああ、本が好きなのは魚も一緒だな」

「オズワルド様、御戯れもほどほどに」

「なんだい、お前の退屈しのぎに良いと思ったんだが」

返答はなく、グスタフが軽い一礼の後に部屋を辞する。言葉遊びはお気に召さないようだ。

オズワルドは苦笑と共に溜息をつき、手にした本を開く。見返しの部分に挟まれたアーレフからのメモを手に、目を落とす。

まだ公用語を書き慣れないのか、小さなたどたどしい字が紙面に踊っている。

彼特有のメモを一瞥し、オズワルドは複製された本を検分する。

通常の製本で貼られている見返しは表紙の布を抑えないよう、中央だけ糊付けされ仮留めされていた。メモは残したが自分の目で見ろ、ということだろう。見返しを破らないよう慎重に加工された麻の表紙布を引き抜く。経年劣化や持ち主が汚したものであろうか、表紙の染み汚れまで忠実に再現されていた。

薄いベニヤのような木製の表紙芯の表面に、メモが記す通りの文字が並んでいた。どういう加工を施したのか、沈殿した黒色の具合は模倣にしては随分古くに付けられた物のように見える。鼻を近づけてみたが、古書特有の劣化したインクの臭いは感じられない。ということとは、インク以外の物で書かれたのだろう。表面を親指の腹で撫でて、木の感触しかなかった。

いざ本の中を拝見しようと表紙を戻したところで、静寂を壊す音が階下から響いた。

「オズー！ どういにいる!!」

聞き馴れたアーレフの怒声。

オズワルドは片眼鏡を外して本を机に起き、苦笑を浮かべながら近くの杖を取った。柄に鷹の意匠が施されたそれを手に立ち上がり、声の主へ顔を見せるべく廊下へ出る。

「やあ、思ったよりも早かったですね」

「どういう意味だ！」

雨の中走ってきたのだろう、全身水浸しになったアーレフが階段上のオズワルドを睨み叫ぶ。

アーレフの特徴的な白く長い頭髪は癖あるものだが、今は濡れたせいで完全に萎んでいた。艶やかな褐色の肌と額のちようど中心に飾られたルビーは、彼が異国の出身であることを示している。纏う衣装はまるでアラビアンナイトが本の世界から飛び出してきたような服装だが、鍛えられた彼の体をほどよく隠していた。アーレフは襟足のあたりで結んだ髪を解くと、グスタフから無言で渡されたタオルを受け取り、乱暴な手つきで水気を拭いた。

「まあ立ち話も何です。ちようど私の部屋が暖かいので、どうぞ」

アーレフの怒りの声を受け流し、オズワルドは今出たばかりの書齋へ彼を促した。

「貴方をお願いした資料は助かりました。本の複製もどいう手順で行っているのか、聞いてみたいくらいです」

暖かい室内に通され、グスタフが淹れた紅茶を飲むアーレフに心からの謝辞を送る。

ぶつきらぼうな様子で一言「当たり前だ」と鼻を吸りながら、アーレフは事もなげに言った。

「君に渡した本は複製じゃない、原本だ」

「……まさか」

「本当さ、現に今僕が持っている本が複製なんだ。作った本人が言ってるんだぞ」  
そう言いながら、アーレフが懐から包みを取り出した。

オズワルドは受け取り包みを開く。中から出てきたのは、まさに先ほどまで検分していた本と全く同じ物だ。

「確かに『複製が欲しい』とは、言いましたが」



「表紙裏の文字を見ただろう、あれはインクじゃない。その本——というか日記の部分は一般的な万年筆に使われる顔料インクだ。そもそも今の時代に没食子なんて使ってる奴いないだろ」

「ああ確かに。没食子インクは中世後期から二十世紀半ばに利用されたもので、古書なら経年劣化でもう少し茶になっててもおかしくはありませんね」

言いながら、オズワルドは原本とされる本の表紙を取り外した。二人の前に黒いインクのメモ書きが晒される。

「没食子インクなら確かに含まれる鉄が空気に触れ、酸化し黒くなる。けど調べてみたが、この液体には没食子インクなら見られるはずのタンニンは確認できなかった」

変わりに、とアーレフが一度言葉を区切る。

「ルミノールが反応した」

アーレフの言い放った単語に、オズワルドは思わず目を見開いた。

「それ以上は調べてない。ただ、血で書かれた意味深なメモをご丁寧に隠しているんだ、何かあると思った」

「おそらくそれが襲われた理由でしょうね。あとはこの内容を知る貴方の厄介払い」

厄介な物を渡されたものだけ言いたげに、アーレフが盛大なため息と共に椅子に深く倒れこむ。

内容を見ていなかったオズワルドは再び片眼鏡をかけ、原本を捲る。常人からすればまずありえない速度で内容に目を通す彼の目が、次第に興奮で輝き出した。

「アーレフ」

愉悅の混じる上ずった声でオズワルドが呼びかける。

「私の追っているものと貴方が追われているものは、どうやら関わりがあるようですよ」

「勘弁してくれ」

アーレフがあからさまな嫌悪の目を向けてきた。

オズワルドはそれを受け流し言葉を続ける。

「メモの『bragr』は北欧神話の唄の神ブラギ、その『林檎』ですからおそらくイズンを指すのでしょうか。イズンはアース神族に永遠の若さを約束する黄金の林檎

の管理人であり、ブラギの妻です。現に、この日記は一部が古ノルド語で書かれています。ブックコードさえ見つければ、面白いことが判りますよ」

言いながら、オズワルドは杖と本を手に立ち上がった。獲物を捕らえた猛禽の勇ましい目つきと、神の慈悲のような笑みを湛え、椅子に座るアーレフを見下ろす。

「貴方の辞書に知的好奇心という文字があるなら、道中お話しますが」

「あいにくそのページはヤギに食われた」

「では、そのヤギを追って、林檎を見舞いに行きましょう」

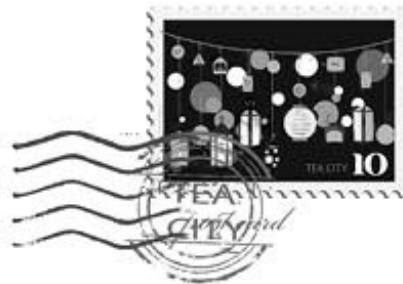
悠然とした動作で部屋を出るオズワルドを追うように、アーレフがため息と共に立ち上がる。

まるで鳥たちの飛翔に合わせたかのように、雲間から天のカーテンが降り注ぎ始めていた。





親方が、仕事がんばってるなって褒めてくれて、ロー  
セングレン美術館のチケットをくれました!



この街で一番大きな美術館です。

館長のソフィーアさんは、館長室に閉じこもってばかりではなくて  
客をよ〜く見て居るから不用意な発言は気をつけて…って  
あの子笑ってたな。ほら、裏路地で知り合ったあの子です。  
館長さんと、知り合いなのかなあ。

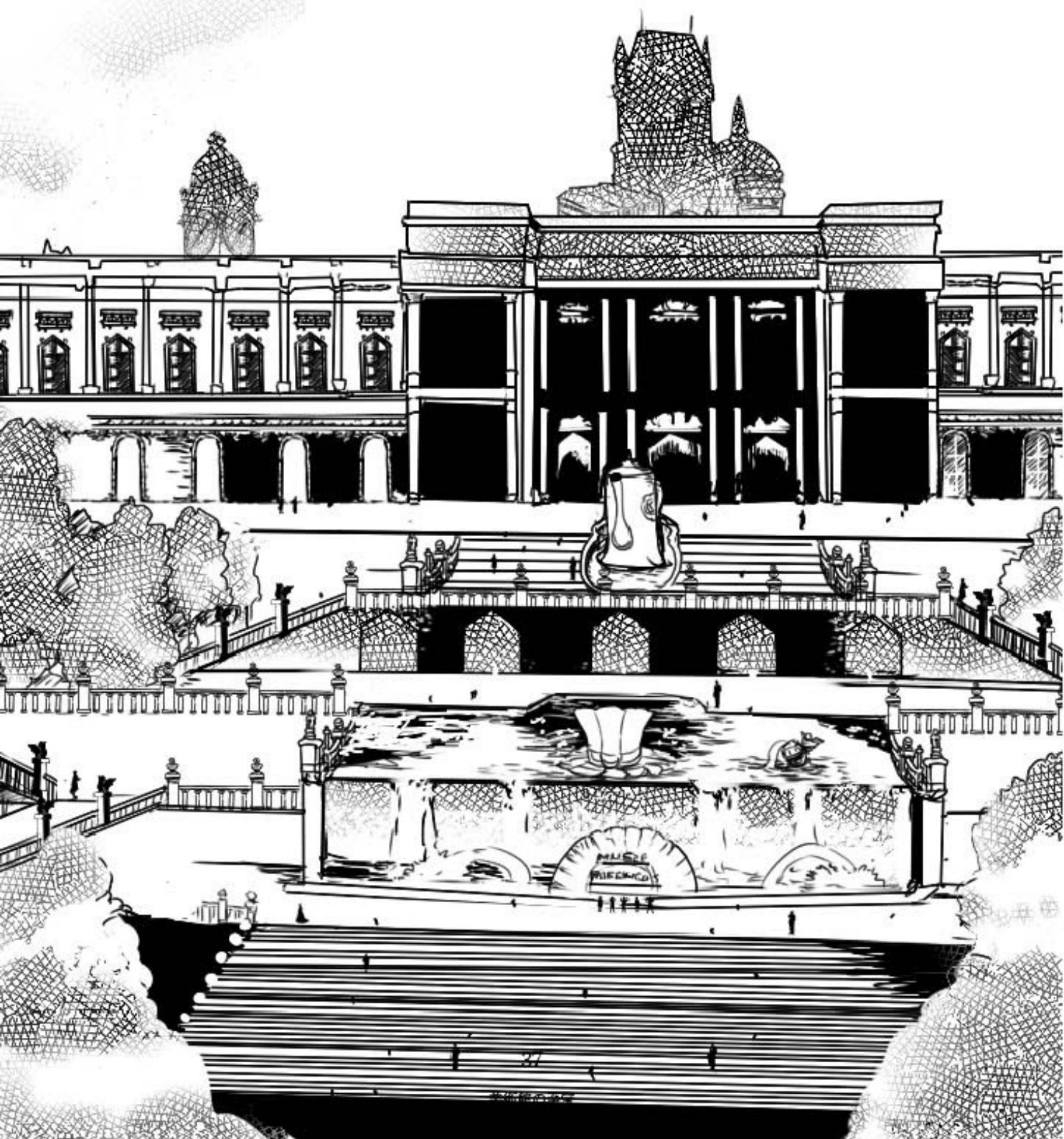
手元のチケットは二枚。あの子を誘ったら……一緒に来てくれると思いますか?  
結果はまた次の手紙でお伝えします。






美術館の至宝

nicco





ローセンクレン  
美術館



都市 × 美術館  
『美術館の至宝』

困ったな  
イマイチだ……

エーベルハルト、  
あの男は誰かしら？

さつきから  
イマイチだの  
何だの失礼  
だわ！

ロニー・オーセン  
グレン氏ですよ、  
ソフィーアお嬢様

あなたが  
今お飲みになら  
れているネルム&  
スヴェンソンの  
紅茶調合師です

N&Sのフレンダー  
ですって？

そんな有名人が  
何をここにへ  
来たのかしら？

ご本人にお伺い  
してみたいかが  
です？

本人に？

はい。でないとお嬢様は今にもロニー氏を殴ってしまえそうですから

さあ、  
どうぞでしょうか？

まあ！

カヤ



お困りのよう  
ですわね、  
ローさん

君は？

当館館長の  
ソフィーア  
ですわ

どうやら当館の  
収藏品がお気に  
召さないようでしたか

どこか

至らぬ点でも？

い、いえっ！  
とんでもない！

うわっ、  
子ども泣かせ  
ちゃったよ！

おまじ  
作戦成功の  
ため

実は次回作のアイデア  
に詰まっています…

色んな美術館を  
巡ってアイデアを得よう  
としているのです

絵画、装飾品、

彫刻、建築…

この収藏品は  
みな美しい

でも、もっと！  
心に訴えかける何か  
何か足りない気が  
してならないのです！

まあ！  
光栄ですわ

落ち着いて  
くださいませ

その心に訴えかける  
完璧な作品でしたら

こちらですわ  
着いていらっしやい



こちらです



わあっ！

この街の風景、  
美しいでしょう？

当館秘蔵にして  
唯一の完成品！

これでも心に  
響かないかしら

—いや、

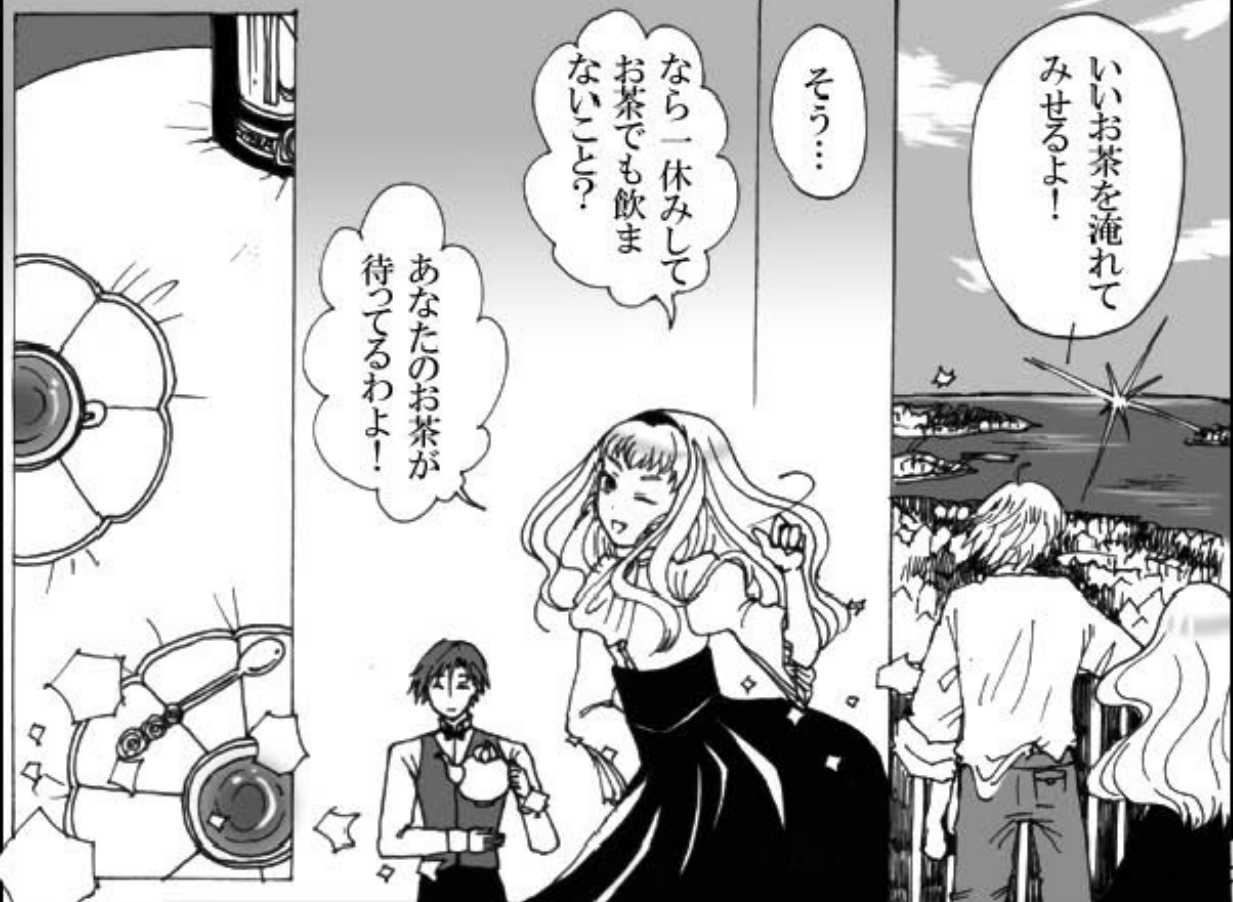


いいお茶を淹れて  
みせるよ!

そう…

なら一休みして  
お茶でも飲ま  
ないこと?

あなたのお茶が  
待つてるわよ!



後日

お嬢様、ロー  
氏よりお荷物が  
届いています

こちらは?

それはサンプル  
品よ。テーマは  
美術館



あら!

当館の限定発売  
になる予定なのよ

これで儲けて  
美術館も  
赤字解消よ!

この間のお茶の  
完成品ですか

そうよ



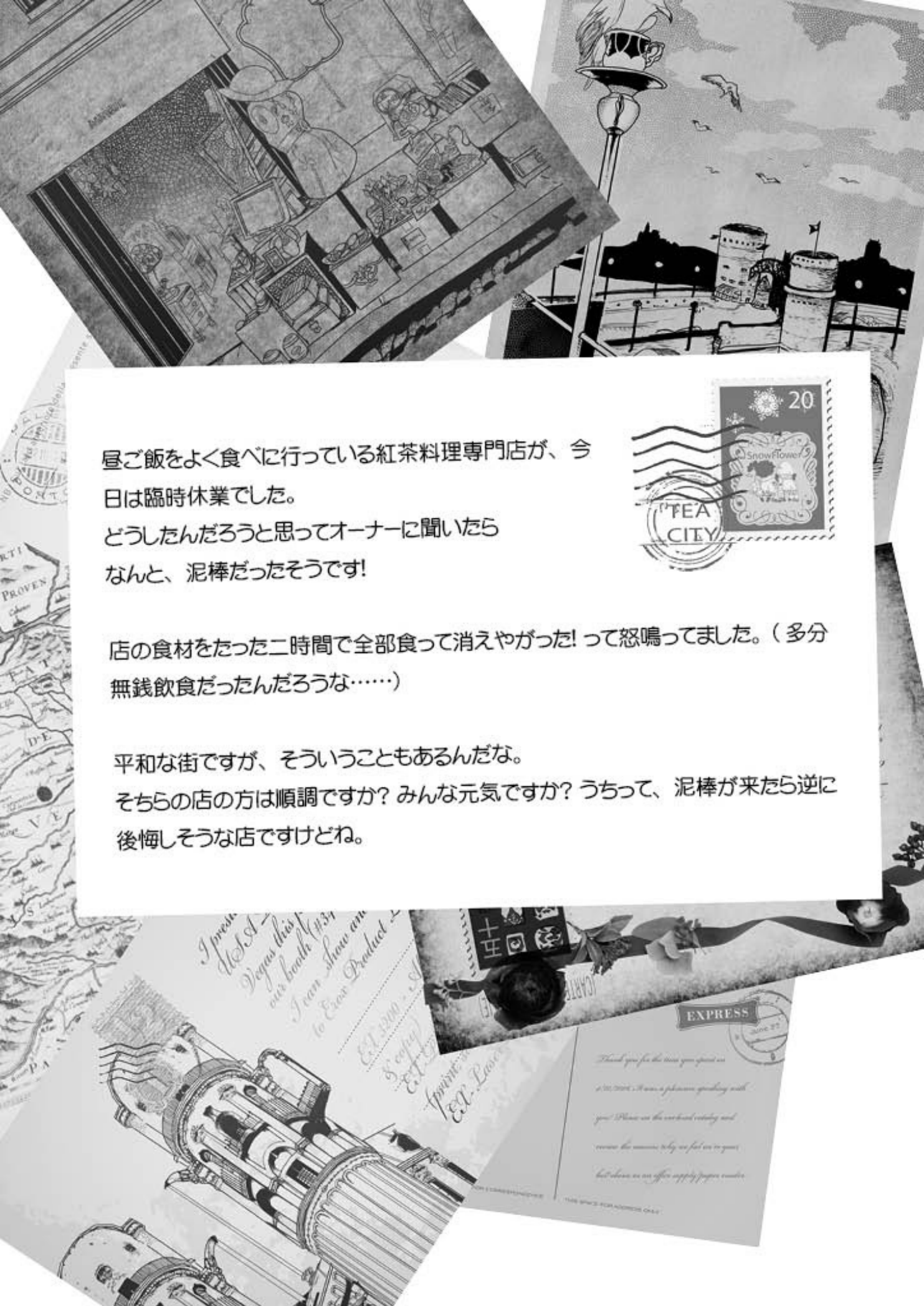


昼ご飯をよく食べに行っている紅茶料理専門店が、今日は臨時休業でした。  
どうしたんだろうと思ってオーナーに聞いたら  
なんと、泥棒だったそうです!



店の食材をたった二時間で全部食って消えやがった! って怒鳴ってました。(多分無銭飲食だったんだろうな……)

平和な街ですが、そういうこともあるんだな。  
そちらの店の方は順調ですか? みんな元気ですか? うちって、泥棒が来たら逆に後悔しそうな店ですけどね。





亡き王妃のための

ティーセット

椎名 恵



この島はお茶都市として名高いだけではない。

海に囲まれた古き良き町並も有名で、今でも戴冠式など王族の伝統的な儀式はこの島のサン・ドテ大聖堂で行われている。

薔薇窓から差し込む光をガラスと鏡の細工で地下まで光を届けることから、別名ガラスドームとも万華鏡聖堂とも呼ばれる。

鎮魂と祈りの場という以上に見事な芸術品であり建造物である。

検問所を旅行者として抜け、島にやってきた二人組の男。

兄のジョージ・ロダン。弟のジュリアン・ロダン。

ロダン兄弟の目的はその大聖堂にあったが、観光にやって来たわけではない。

彼らの名は闇の遺品蒐集家、通称ネクロコレクターたちには知れた名前だった。今回の目的は大聖堂地下に眠る王族の副葬品。

二人は知名度に恥じぬ素早さで、すでに盗みを終えていた。

島にあるカフェの一角。

テーブル席に無造作に寄せられた輝く逸品こそ、『ジゼル妃のティータイムセット』である。

代々お茶をこよなく愛する王族は、優雅なことに死後の審判を待つ間に、お茶をする時間があると考えたのだろう。副葬品にティーセットを添える習慣がある。

生前愛用していたセットであったり、死後特別に誂えたものであったり、他国の副葬品とはまた一風変わっている。

それら王族のティーセットを蒐集したいと考えるネクロコレクターは多い。

実際ジョージの手の中にあるカップは蓋付きで、ルビー、ペリドット、トパーズで四方を飾り、まるで聖杯のよう。小国国家予算の一年分の価値はあるだろう。それほどのものだが、盗みは簡単に終わった。

箱に収められて隠されていたということもなく、テーブルを模した祭壇上に無防備に並べられていた。

まるで地下墓場の女王のように、地上からの薄明かりに照らされていたのだ。ロダン兄弟は颯爽とカップを回収したが、まだ探しているものがある。

『オールデイズ』という銘柄の茶葉だった。

『オールデイズ』は妃の死を嘆き、王が財の限りを尽くし作らせた至上の茶葉。



妃が死後も毎日ティータイムができるように、と作り上げたお茶とされる。

その名の通り永劫に尽きることなく、毎日が新しく、四季で味が変化するとい  
うまるで作り話のような茶葉であるのだが、これが比喻でなく実在するのだとい  
う。

お茶コレクターにちらつかせればカップ以上の価格で取引されるに違いない。

ティーセットと共に埋葬されたはずだったのだが……

最も価値があると思われる茶葉『オールデイズ』はジゼル妃の棺にも祭壇にも  
なかった。弟のジュリアンは諦めてこう理由を付ける。

「やっぱり噂でしかなかったってことじゃないかな」

「歴史書にだってオールデイズの記述がしっかりある。根拠があるんだぞ」

兄ジョージはそんな理屈では納得しない。

「でも実際墓にはなかったし。大丈夫カップだけでも高く売れるよ。蓋についで  
るペリドット大きいし、ルビーなんか色違い二つ！」

「それにティーセットと銘打ってるのにティーポットがなかった。おかしい……  
おかしい」

「落ちて割れちゃったんじゃないのかな。まあいいじゃない。あ、兄さん、茶葉蒸し鶏料理だって美味しそう」

「あのなあ……お前もそろそろこの家業に対して真摯な姿勢を覚えたらどうだ、欠品なしだからこそ、値がつくんだよ、それと仕事に集中しろ」

ジョージが叱るので、ジュリアンはメニューを盾にして頬を膨らませてみせた。「父さんが言ってたよ。この家業は目的だけで生きていいって。僕はおいしいご飯がいっぱい食べればいい。お宝自体に興味がないよ」

ジュリアンの盗みの技術はジョージより高い。期待の大泥棒なのだが対象を見極める鑑定眼がない。

何でも容易に盗み出すが、それがキャンディー一つ分の価値しかないものか、国を滅ぼすほどの価値があるものか判別できない。

ジュリアンの目的は「食べる」ことと「兄さんと仕事する」ことしかないのだ。盗むものへの興味はこれっぽっちも見られない。息を吸うように盗み、吐くようにして売り払う。

事実こうして検分をしながらも、ジュリアンは食事に気を取られている。

その反面ジョージは手にあるノートだけでなく脳内にもぎっしりお宝情報の知識蘊蓄が詰まっている。

価値を把握し、いま闇マーケットでどんな需要があり、歴史の中に埋もれた秘宝財宝の類を捜し、相場以上の見返りを得ることができた。

ジョージの目的は「美学を持って死の財宝を総なめにする」ことと「弟と仕事をやる」ことであった。

仕事をするという行いだけは、がっちりと手を組んでいるので無敵でいられるが、日常ではこうして衝突することになる。

「茶葉だけ盗んでいくバカはいないだろうし」

「じゃあ、本当に死んだジゼル妃が冥府の道行きで、お茶会して飲んだんだ！すごい発見だよ兄さん」

「賛辞にも金にもならない発見で喜ぶな。それに死体が紅茶を淹れて飲むなんて話、聞いたことがない」

何でもいいから兄を納得させようとするジュリアンを、ジョージは切り捨て、拡大鏡で改めてカップの再検分をはじめた。カップの底はダイヤを削って作られ

ていて、微細な角度を付ける度にキラキラと光って忙しい。

そこまでするなら全面ダイヤをくりぬいたカップにすればよいとジョージは思うのだが、この世にそれほどまで巨大なダイヤは存在しない。口を添えるカップ上部は陶磁の美しい細工で出来ていた。

「いくらになるかなあ、楽しみだな」

バジルソースをたつぷりとからめたパスタを横に押しつけて、素手でジュリアンが蓋に触ろうとするのをジョージは手で叩き、手袋を差し出す。

ジュリアンはこの兄の潔癖症が面倒だと常々思う。

「だめだ。カップだけではティーセットと銘打ってマーケットに出すこともできない。当然『オールデイズ』も一緒だ」

「こだわるなあ。じゃあもう一度大聖堂に行ってみるしかないかな。もしなかったらもう諦めてこれだけでマーケットに出そうね、約束だよ」

一度盗みに入った場所には極力近づきたくはなかったのだが、二人は観光客を装って再び大聖堂へ向かった。

大聖堂では地下墓地からカップが盗まれたことに、まだ気づいていないよう

だった。

修道士や信者達が落ち着いた様子で、木漏れ日のような光の中で祈っている。

「それらしき記述や置物がないか探れよ」

「はいはい！」

光の射し込んだ所を踏まない遊びだろうか、右へ左へと飛び跳ねて遊ぶやう気のない弟の姿を見て、ため息をつく。しかし万華鏡聖堂と呼ばれるだけある、光が巧みに操られ陽光の中に立っているかのよう。

ふとジョージは視線を大聖堂右翼へ投げた。

この右翼下地下に、カップは納められていた。

遮光もせずに二百数年間光に晒しておくとは、全く王室墓地管理者は芸術保護というものが分かっていない。

ただでさえ、光溢れるこの大聖堂なのだから――

ジョージはそこまで考えて、思考を止めた。

むしろ、その光に意味があるのでは。

「――うん、そうだな……むう。そうだとすれば、全て理解できるな」

思いついた仕掛けを確認するように、大聖堂をぐるりと睨め回す。

「だけど……そうになると、どうやったって欠品になっちまうな」

何を納得したのか、ジョージは抱えていた『ジゼル妃のティータイムセット』を告解室に置き、ジュリアンを呼んだ。

「帰るぞ！ 仕事は終わりだ」

「えっどうしたの、見つけたの」

「見つけたといえは……見つけたが、とりあえず欠品をマーケットには出せない」  
「どういうこと」

ジュリアンが不満を垂れ流すので、ジョージは大聖堂の天井を指さした。

「あそこ、夏至の薔薇窓だろ、あっちが冬至の窓」

四季を通して射し込む光は、大聖堂内を照らし地下まで届くように計算されている。

「カップはテーブルを模した祭壇にあったの、覚えてるな？ あの位置はちょうどこの下だ」

ジョージは金の意匠がされた飾り金属板のハンドホールをかかとで踏み鳴らし

た。同じ意匠の金属板は他にも聖堂内に何カ所か設置されている。

「季節の太陽光がここに射し込んでカップに注がれる。つまり、大聖堂がティーポットって構造だったんだ」

『オールデイズ』の名の通り、毎日毎日新しく注がれる光という名のお茶。カップには蓋がついている。

光の差し込む角度によって、それぞれの宝石の色をカップ底に透過するのだ。ルビーの赤——紅茶、ペリドットの若緑は緑茶、小麦のようなトパーズはハーブティだろうか。

それら色（味）を得た光は、カップ底のダイヤの乱反射でカップ中を満たす。夜には、柔らかな月の光で淹れた茶を楽しむことすらできただろう。光の茶葉、それが『オールデイズ』。

ほう、とジュリアンはその構造に納得した。

「だから、『ジゼル妃のティータイムセット』を全て揃えて出品するには、太陽と大聖堂、地下墓地までまるごと盗まなきゃいけない。そんなの無理だ」

ジュリアンもあっさりとジョージの言葉に頷いた。それが盗めるものか、盗め

ないものかの判断はジョージより正確だ。

「妃の冥府のお茶会を泥棒に犯されないようにとは、歴史書通りの溺愛っぷりだったわけだ。それが分かれば俺は十分だ」

「泥棒に美学を持つてる相手にしか、その愛は通じないけどね」

ジュリアンは光満ちる大聖堂を見回し、告解室を残念そうに見つめていたが、ティーポット仕切り直して歩き出した。

「いくら僕でも太陽は盗めないな。じゃあもう、この都市には用はないね。無駄足だったとは思いたくないから、ねえ兄さん……」

「俺の調査不足が悪かった。好きなだけ食って、飲んで、それから次の仕事だ」  
「やったあ！ お宝の代わりにこの都市のお茶を奪い尽くしてみせるよ！」

ジュリアンは鼻歌を歌いながら、緑の丘を駆け下り市街地へ向かっていく。

財布の都合もあるので、この盗みは完遂されないことを祈りながらも、ジョージは丘の上からお茶が死後をも支配する、美しい海上の紅茶都市を見回した。





あの子とまた会いました!

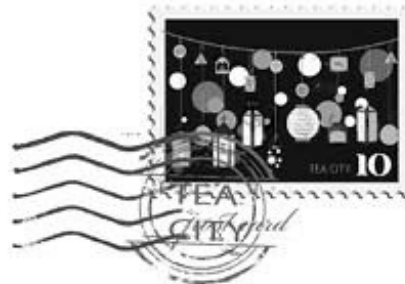
一緒に大通りを散歩したんだけど、学校の前で止まって「こういう所に一度通って見たかったなあ」って言ってた。

僕も学校とは縁がないけどね。

お茶の搬入で入ったことがあるけど、この学校はお茶都市の学校だけあって、妖精の類がけっこう居るみたいです。

できるだけ見えないフリしてたけど、見えてるって気づかれたら色々いたずらの手伝いとかさせられちゃうんだろうなあ。

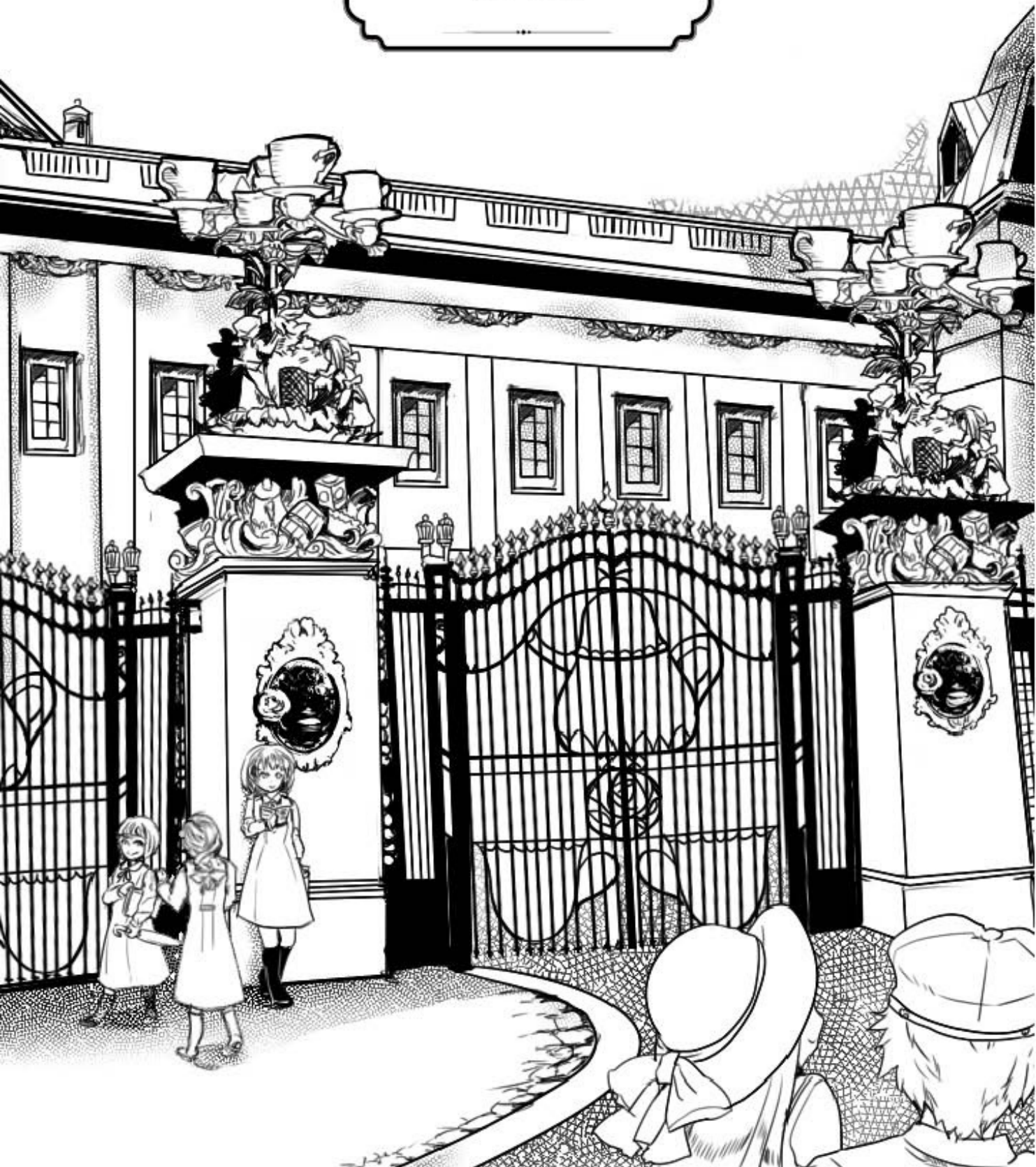
普通の人のフリをするのも、苦労しますね。





黒の迷子と望郷の鏡

さいふあ



「ねえ、『金色の紅茶』を知らない？」

唐突に紡がれた少女の声が、人気の無いテラスに響き渡る。

その声に、リコは手にしていた辞書を閉じ、正面にいる栗色の髪と瞳の少女の方を向いた。

きよとんとして彼女を見つめると、彼女はどこか遠くを見るようにして続ける。

「本当は、金色の紅茶じゃなくて、金色の砂糖なのだけだ。紅茶に入れると、紅茶が金色に染まるの」

少女の言葉に、リコは取っ手のないティーカップ——ティーボウルというらしい——を持ち上げ、両手で包み込んで暖をとりながら、紅茶を金色に染める砂糖とはどのようなものだろうと首を傾げる。

現在リコ達がいるのは、この街で一番大きな学校の食堂、そのテラスの一角だ。吹き込む風は故郷のものとは違って冷たく、一月ほど前に移民してきたばかりのリコには辛い。

制服であるワンピースの上にはおったカーディガンの隙間から入り込んだ冷気に少しだけ身体を震わせて、リコはくしゅんと小さなくしゃみをした。

「大丈夫？」

栗色の髪と瞳の少女の言葉に頷いて、リコは口を開く。

「紅茶、金、染める砂糖？」

リコの故郷では「白亜の街」と呼ばれるこの街の公用語は、リコのように東の国出身者にとって難解なものである。したがって、リコの語学力は聞き取りに関してはかなりの上達を見せたのだが、話す方はからきしだった。

たどたどしい事この上ない発音に少女は不快な表情を見せる事もせず、「そう」と説明を始める。

「この間の休暇中に、大切な友達から貰ったの。もう一度会いたくて捜したのだけれど、会えなくて。『金色の砂糖』だけが手がかりなのだけれど——」

少女の説明にリコは困惑して、横に首を振る。

リコはこの街のことは詳しくないし、故郷でも聞いたことが無い。

リコの反応に、少女は「気にしないで」と苦笑した。

特に期待はしていなかったのだろう。

会話が途切れたの機に、リコはティーボウルをテーブルの上のソーサーに戻し、

再び辞書を手に取る。

テーブルに広げられていた宿題を見つめて、嘆息した。

当初の予定では宿題をこなすはずだったが、なかなかはかどらない。

まだまだ語彙も文法も不足しているリコにとって、教科書の問題を理解するだけでも一苦勞なのだ。

この街は、東西の商品が集まる交易都市だ。東の国の商品も流通しているのだが、その中でもリコの国は特に辺境にある為、故郷の品物は商品価値が高い。

リコの家族は、それを見越して移住してきたのだ。

白亜の街に移住して数日の間は見るもの全てが珍しく、興味がつきなかった。しかし最近——特に学校が始まってからは、言語の違いに苦勞させられている。

探していた単語の意味をようやく理解し、辞書をテーブルの上に戻す。

パラパラと教科書をめくっていると、誰かに肩をつつかれた。

「はい。」

黒目がちの瞳を瞬かせながら周囲を見回してみるが、リコの正面にいる少女は自分の宿題に取り組んでいるし、近くに知り合いの姿は見えない。

気のせいかと教科書に向き直ると、今度は自慢の黒髪を引っ張られた。誰だ。

もう一度周囲を見回してみても、やはり犯人は分からない。

首を傾げながら、もう一度教科書に向き直った時だった。

「あ……」

するり、と首元のリボンがほどけた。

ほどけるだけならば問題は無い。拾い上げて結び直すだけだ。

しかしリボンは床に落ちるのではなく、ひらひらと宙を飛ぶ様にテラスを横切っていく。

何とも信じがたい光景だ。しっかりと結んであったはずなのに、なぜほどけたのだろう。

不思議に思いながら、リコは立ち上がった。

「どうしたの？」

急に立ち上がったリコに驚いて、少女が声を上げる。

「ちょっと、ごめん」

拙い言葉でこの場を抜ける事を伝えたと、リコはリボンを追って走り出した。

パタパタという靴音が、放課後の廊下に響く。

いくつもの教室を通り過ぎ、中庭を抜けても、リボンは地面に落ちることが無かった。

「『ああもう！』」

故郷の言葉で毒づきながら、リコはリボンを追いかける。

家に帰れば代わりのリボンがある。しかし、リボンは手を伸ばせば届きそうな位置でひらめいているので、諦めるのも癪なのだ。

何度か廊下を曲がり、そして再び中庭に出た瞬間だった。

「『わわわっ!』」

急に足がもつれて、リコは悲鳴を上げた。

体勢を立て直す事も出来ずに、ビタン、と情けない音を立てて大地と抱擁を交わす。

「『痛い……』」

涙目で眩き、打ち付けた膝をさすりながら周囲を見渡す。

しかし人影は見当たらず、何かおかしい、とリコが不安に駆られた時だった。

「……やつと来たか」

不意に知らない声が響いた。同時に、ぐいっと腕が引かれて身体を起こされる。そして、リコの前に誰かが座り込んだ。

真っ先に目に入ったのは、太陽の光を溶かし込んだ様な、金色の髪と瞳だ。この地方の貴族が着る様な服装と繊細な顔立ちを見て、リコは思わず息を詰める。そこにいたのは、信じられない程に美しい青年だった。

青年はリコを見下ろし、何かに気づいたように瞬きをする。

「……お前、移民か。道理で引き込みやすいと思った」

「え？」

「その点『嬢ちゃん』は引き込みにくいんだよな」

「嬢ちゃん？」

首をかしげていると、返事が返ってくる。

「ここではない『どこか』に行きたい、帰りたいと思っている人間は引き込みや



すいんだよ。

それと、嬢ちゃんは嬢ちゃんだ。お前と一緒にいただろ、栗色の髪と瞳の可愛い嬢ちゃん」

その言葉に、リコは顔を上げた。

リコの様子にはお構いなしに、彼は言葉を続ける。

「嬢ちゃんは俺に気づけねえから、探し物を持ってきてやったのに渡せなくて困ってんだ。お前が渡してくれよ」

リコの承諾を聞く前に、青年の手のひらに小瓶が現れる。

ぽんと投げ渡されたその小瓶を、リコは慌てて受け取った。

「これ、何？ 誰、渡す？」

頼まれたのは良いが、誰に渡すか、これが何なのか分からない。

そもそもこの青年は誰なのだ。なぜリコに頼むのだ。

疑問が渦巻くが、青年の言葉は要領を得ず、分からなかった。

リコの質問に、青年は面倒くさそうに口を開く。

「これは『金の砂糖』。嬢ちゃんの名前は——、悪い、知らねえ」

何だそれは、と思いいながらも「金の砂糖」を探している少女には心当たりがあったので、リコは頷く。

するとまた唐突に、青年の手のひらに小さな包みが現れた。

「これもやるよ。『望郷の鏡』っていうんだが、丁度良いな。お前への駄賃だ」  
「またもや投げ渡された包みを、リコは何とか受け取る。

「じゃ、よろしくな」

その言葉に顔を上げると、目の前に青年の手があった。

「え？」

嫌な予感に声を上げると、青年の手はツンとリコの額をつつく。

その途端にリコの身体は後ろ向きにぐらりと傾き――。

「きゃっ」

誰かにぶつかった。

「ごめんなさい、大丈夫――あら」

どつんとぶつけた頭をさすっていると、聞き知っている声が降ってくる。

リコが顔を上げると、栗色の瞳とぱっちり目が合った。

「あ……」

「金の砂糖」を探している栗色の髪と瞳の少女はリコを見て息を詰めたあと、ほっとその息を吐く。

「良かった、無事だったのね……」

疲れた様に笑う少女に、リコは首を傾げた。

一体どうしたと言うのだろう。

「急に走り出したかと思ったら、途中で姿が消えてしまったんだもの。『チェンジリング』かと思ったわ……」

「『チェンジリング』？」

聞き慣れない言葉に、リコはまた首を傾げる。

その様子に、栗色の少女が苦笑した。

「えっとね——」

少女の説明によると、「チェンジリング」というのは、人間が不思議な世界に連れ去られたり、迷い込んでしまう事らしい。その世界の住人は人間に好意的で

帰してもらえなかったり、逆に人間を襲ったり、食べたりするのだという。帰る事ができるのはごく稀な事らしい。

「あ……」

思い当たる節に、リコはかすかに吐息を零す。

では自分は、その世界に誘い込まれていたとでも言うのだろうか。

あの金色の青年は人間では無く、妖精という存在だったのだろうか。

そんな事を考えて、しかしそれを伝える程の語学力が無いリコは、手に持っていた小瓶を差し出す。

「あなたに。男の人、貰う」

「……わたしに？」

リコの言葉に少女は首を傾げ、ありがとうと呟いてから小瓶を受け取った。

そっと開けて中をのぞき込み、——息を飲んだ後、花開く様に笑う。

『『金色の彼』に会ったのね……』

そう呟いてから、リコが抱えている包みに目を留めた。

「それは？」

「わたし、貰う」

少女に答えて、リコは膝の上で包みを広げてみる。

その途端に、甘い花と、茶葉の香りが広がった。

「どうやる、分からない。……飲む。一緒」

しばらく考えた後、リコはそう口を開いた。

閉まりかかった食堂で湯とティーセットを借り、テラスの一角に陣取る。

鮮やかな赤褐色の水面に、様々な色合いの、見たことも無い小さな花が浮かんでいた。

ティーカップの底には、宝石の様に輝く小さな結晶が沈んでいる。

「あら、きちんと漉したはずなのに……」

リコと同じようにティーカップをのぞき込んだ少女が、苦笑して呟いた。

口に含むと、甘い香りが鼻を抜け、僅かな渋みが舌を痺れさせる。

「良かったら、使って」

リコが渋みに顔をしかめていると、目の前に小瓶が差し出された。

ありがたく受け取って、細かな砂状の「金色の砂糖」をティースプーン一杯ほど入れてみる。

渦巻く金色の美しさに、リコは息を詰めた。

しかし次の瞬間、とろりと溶ける金色が色を変え、鮮やかに色づく。甘やかな香りが、どこか懐かしさを感じる控えめなものに変わった。

「『桜』……」

故郷の花を連想させるその色合いを、リコはしばらくの間見つめる。

リコの正面で、栗色の髪と瞳の少女は、どこか切なそうに小瓶を眺めた。

唇が金色の彼の名を紡ごうとして、その名を知らない事に気づいた少女は苦笑し、そして。

唇を閉ざし、自分のカップの中でゆらゆらと揺れる金と緑の水面を見つめたのだった。



あの子にお茶のことを聞かれたのに  
ちゃんと答えられなくて恥ずかしい思いを  
しちゃいました。

いつかは調合もしてみたい、なんて言ってたけ  
ど、言ってるだけだったな。ちゃんと勉強しようと思います。

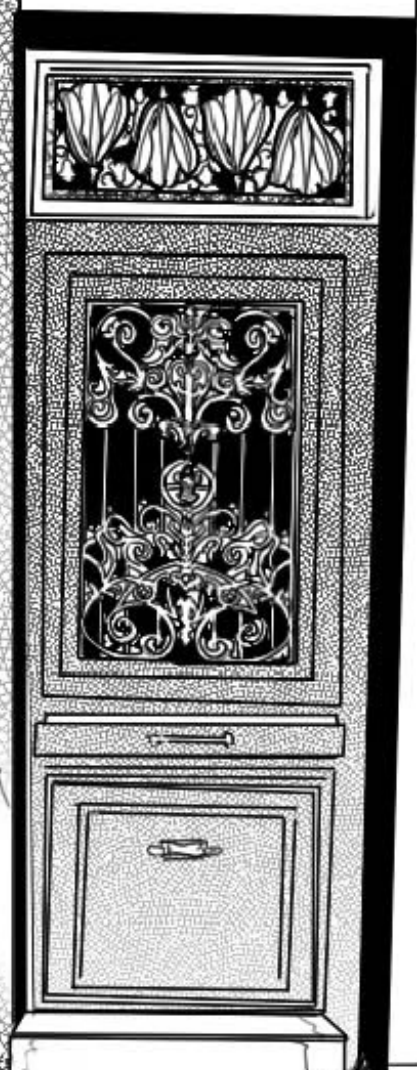


勉強するためにも本を探しに行こうと思って古本街へ行ってみたんだけど、魔  
法紅茶学や冒険記とか、稀覯本とか僕にはちょっとまだ敷居が高そうです。

でも最初のフレーバーティーは、あの子をイメージしてプレゼントしてあげようって  
決めました。



  
 Cifrado Libro Apocalipsis  
 ~ Aref ~  
 雪本 步





タルティープには虫が住む

巨大な地下を罫にし

夜な夜な本を食い荒らす

そんな口承が都市の子ども達の間で流行っていた。誰が歌い始めたのかは判らないが、ここ数年で大人たちも耳にするようになっていた。

「タルティープ」は都市の中でも隅のほうにある小さな古本屋の名。異国から移住してきた双子が営んでおり、表立っていのはる妹の方で兄のがいることを知らないという客も中にはいる。しかし、古本屋のもうひとつの顔を知る一部の人々には妹よりも兄の方が、その名と腕を知られていた。

「アーレフ！」

頬に外気、瞼に白い光を感じ、アーレフは薄く目を開いた。寝不足と薄暗い部屋に順応した目が痛みを覚える。

地下と地上を繋ぐ階段の上、いつも閉めきられている扉の位置で影が仁王立ちをしていた。長く太いツインテールとゆったりとしたニッカボッカ。表情は

逆光によって見えないが、艶やかな黒髪に己と同じ褐色の肌は、この都市では見間違ふことない妹のものだ。

しかめっ面をしたまま、アーレフは光から逃れるように身を振った。

「ラナー、眩しい。本が焼ける」

「今すぐ身なりを整えて！ アーレフにお客様！」

客、という単語にアーレフは渋々と体を起こした。わざわざ妹が呼びに来るということは自分向けの客、ならば出向くしかないだろう。

三日ほどそのままだった作業着を着替え、納まりの悪い白い癖毛を結わえ直す。すらりとした筋肉質の体をゆったりとした民族衣装に収めている間に、階段上から再び声をかけられる。

「なんです、また籠もっていたんですか？」

聞き覚えのある声に、思わず無防備なままそちらを見てしまった。

階段の上に胡散臭い——アーレフにはそう見える笑みを浮かべて立っているのは、この都市に古くからある城の主たるオズワルドだ。彼は古文書の解読を趣味としているため、古本を取り扱うアーレフたちとは自然と旧知の仲に——とい

うか主にアーレフともはや腐れ縁のような関係となっている。オズワルドは交易を生業にしており、アーレフたちもある品では世話になっているのだが、正直なところあまり関わりたい人物ではない。

あからさまな苦い顔をそのままに、アーレフはため息と共に悪態をつく。

「なんだ君か」

「顧客に対してその態度はないんじゃないですか？」

「っていかここに勝手に入るな、帰れ」

「そうですか……」

表面では残念そうにしながらも、オズワルドは我が物顔でゆっくりと下りてくる。片足の悪い彼にとって、幅も狭く足場の悪い急な階段を薄暗い中では下りるのは苦勞しそうなものである。しかしオズワルドは実に優雅な足取りで階段を下りきり、アーレフの側に立つ。それから若干大げさな役者のような身振りで、工房の中を歩きだした。

「実は先日、大変良い茶葉をいただいたんです。今年の新茶でまだ市場には出回ってません、早摘みのアッサムなんですけどね」

オズワルドの言葉に、アーレフの眉が興味に動く。

「貴方が早摘みのアッサムを気に入っていたと思い出したので、試飲ついでにどうかと思ったのですが」

言いながら、オズワルドは工房の作業台に置かれた本を手を取った。

それはつい先日、他の都市から噂を聞いて来たという男に修繕を頼まれたものだ。黒いローブを目深に被り顔を隠すおかしな客であったが、今までも身分を隠した地方貴族や王族も——アーレフからすれば請け負った本で全て判るのだが頼りに来ることが多々あったため、今回もその手だろうと思った。中身は依頼主の秘密に関わると、若干乱暴にオズワルドの手から取り返し睨みつける。

「……詐欺師め」

「なんとでも」

アーレフの刺すような視線を、オズワルドは口元を挑発的な笑みに変え、あっさりと受け流した。交渉事に慣れた彼からすれば、アーレフの憤怒の視線など子猫の威嚇と同じようなものなのだろう。さほど年齢も離れていないが、アーレフの怒りは毎回と言って良いほど簡単に往なされ、何に対してかわからぬ不満が募

る。その心中すらオズワルドはきつと気づいてやっている、それがまた面白くなかった。

「ところで、今日は貴方に依頼がありました」

「受けるとは言っていないぞ」

本棚の近くに置かれた階段型の昇降台に腰掛け、オズワルドが本題を切り出した。アーレフは憤りを隠さなかったが、お構いなしに続きを話し出す。

「ハーブの毒性についてまとめた本を見せていただきたいんです。可能であれば過去に起きた死亡事故の事例も一緒に」

オズワルドはいつも突然「何か」を持ち込んでくる。今回もその「何か」があるのだろうか、頼まれた内容にアーレフは思わず口を挟んだ。

「茶葉は君の領域だろう。それにうちは図書館じゃない、リファレンスは他へ行け」

「死亡事故の事例なんて図書館にあるわけないでしょう？ その手の蔵書は貴方のほうが信用できます」

オズワルドの言う通り、表向きたる古本屋「タルティープ」の蔵書は並大抵

のものではない。中には古書マニアが財産を投げ売ってまで欲しがる稀覯本きこうぼんや、六千頭の子牛を殺して作られた僅か三十五部のヴェラム紙刷本の聖書原本エクセンブラリアの一冊が眠っているという噂まである。その噂に見合うように、アーレフの工房を兼ねた地下書庫は広大で、天井に届くほどの本棚が闇の向こうまで立ち並んでいる。その全てを、彼らは把握しているという。

しかし、当の双子はその真偽について名言はしていない。

「ところで、その本の表紙はそのままなんですか？」

オズワルドが指摘してきたのは、アーレフの手中にある本だ。先ほどオズワルドから取り返し、そのまま持っていたようだ。

依頼主に渡された時からある小口下方に広がる茶色の大きな染み。日記の主がそそっかしい性格だったのか、本文まで染み込んでおり、装丁を変えたところで隠しようのないものだ。そもそも依頼主には、本の痛みを直す程度で良いと言われている。

「僕が頼まれたのは修繕であって改修じゃない、紙に染み込んだものは戻せないだろ。ページを複写しない限りは無理だし、中は故人の日記だと聞いている。肉筆

のほうが良い」

「日記にしては一部言語配列がおかしかったんですが」

「読んだのか！」

「ほんの数行です、内容の把握まではしてませんよ」

良くも悪くも、オズワルドは仕事の関係もありバイリンガルで、趣味のせいで読むのが早い上に聡明だ。彼の手に渡ったのはほんの一瞬だったが、その一瞬でそこまでは把握したようだ。

そして大抵こういう事が始まると、何かに巻き込まれるのは時間の問題だ。そう思い出し、アーレフは小さな頭痛を覚える。

「そうですか、日記……」

オズワルドは口元を隠しながら呟いていたが、アーレフは彼の目の輝きを見逃さなかった。その輝きの意味をアーレフは知っている。オズワルドが何かの謎を見つけたときに見せる光、だと。

「アーレフ」

「いやだ」

言葉を遮るように、アーレフは即座切り捨てるように答えた。

オズワルドが僅かに驚いた顔をする。

「まだ何も言ってますよ」

「君がそうやって僕の名前を呼ぶ時は絶対良いことがない」

「嫌ですねえ、新茶を譲ってるじゃないですか。商人は信頼が命なんですからね」

アーレフはオズワルドに背を向け、意識して目を合わせないようにしていた。それでもオズワルドが時たま見せる詐欺師の笑みを浮かべていると、容易に想像できた。

「君の辞書は信頼の意味を間違えている。買い直せ」

「早摘みのアッサム、いららないんですか？」

「……」

痛いところを突かれ、アーレフは反撃の言葉を失う。

紅茶は——正確に言えば紅茶葉はアーレフにとって命の源のようなものだ。都市の中に紅茶専門店はたくさんあるが、オズワルドの取り扱う茶葉はそのほとんどが一級品であり、誼だからとほぼ原価で買わせてもらっている。ラナーが喜ん



でいるのも知っているし、兄としては妹の喜ぶ姿は見たい。

——しかし、それに対する代償としては大きくないか？

オズワルドに巻き込まれ散々後悔した様々な記憶が脳裏をよぎる。

言葉を無くし、考え込んでしまったアーレフの背に、オズワルドは一言ぽつりと囁いた。

「……全て焚書」

「死ね詐欺師っ!!」

振り返りながら叫んだアーレフの目の前で、善人の皮を被った詐欺師が満足そうな笑みを浮かべていた。

もうすぐ大きな嵐がくるだろう。

その事実とうんざりとしながらもどこか心の奥底で期待している自分がいることに、アーレフはまだ目を背けていた。

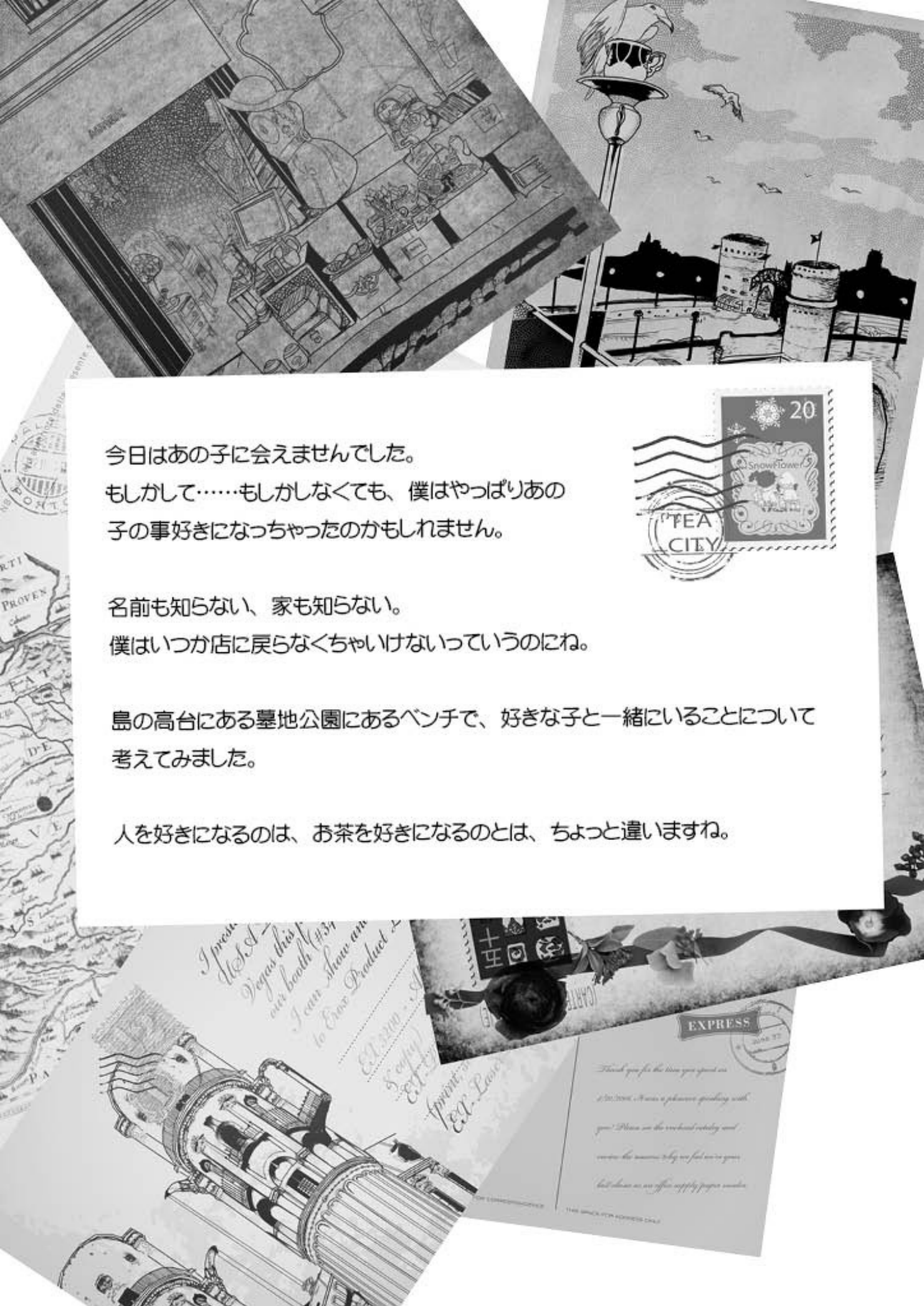


今日はその子に会えませんでした。  
もしかして……もしかなくても、僕はやっぱりあの  
子の好きになっちゃったのかもしれない。

名前も知らない、家も知らない。  
僕はいつか店に戻らなくちゃいけないっていうのにね。

島の高台にある墓地公園にあるベンチで、好きな子と一緒にいることについて  
考えてみました。

人を好きになるのは、お茶を好きになるのとは、ちょっと違いますね。





墓守り人

高里潤



彼に会ったのは  
雪の降る  
寒い日だった



彼は墓地の外れにある  
木の下ベンチに  
静かに座っていた

# 墓守り人

高里潤



あの  
何をされて  
いるんですか

風邪を  
ひきますよ



ああ  
そうだね

ありがとう

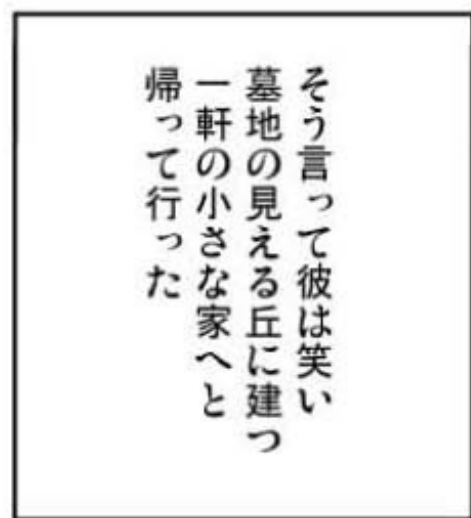


あの方が  
好きだったんだ



お茶をして  
いたんだよ

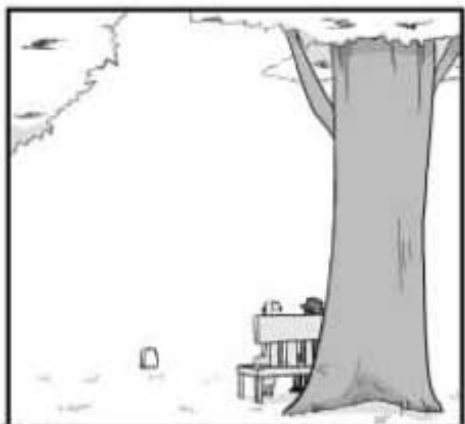
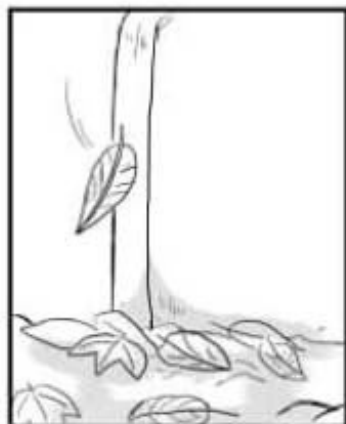
えり



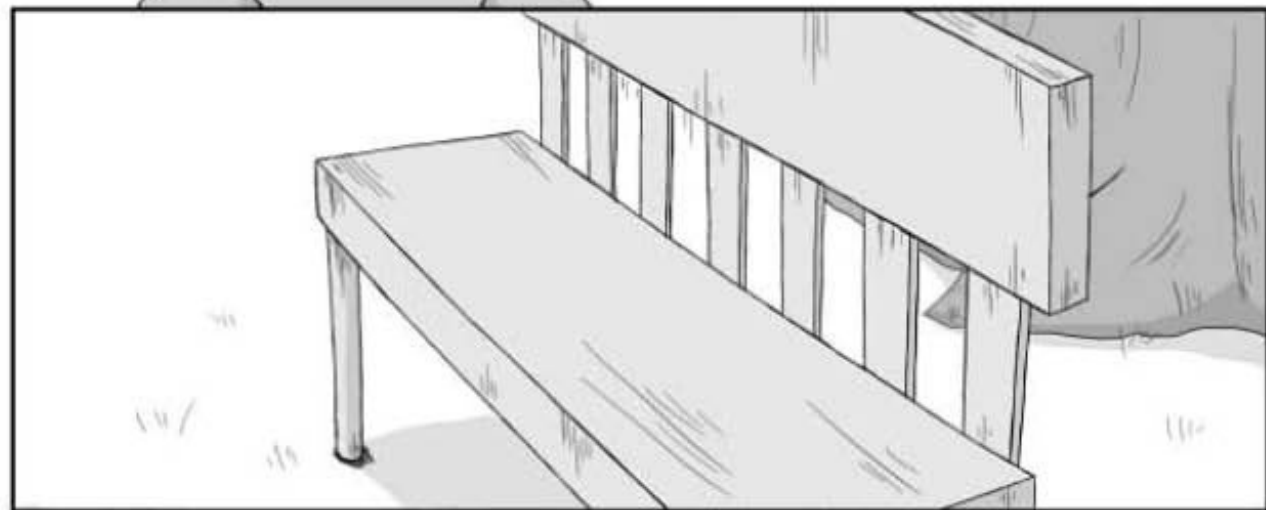
そうやって彼は笑い  
墓地の見える丘に建つ  
一軒の小さな家へと  
帰って行った



毎月始めの日に  
必ずお茶をしていてね  
いつも私が  
つきあわされていた



彼は毎月同じ日に  
そこに座っていた



すまないね  
こんな私の  
わがままに  
君を付きあわせて  
しまつて

だが、彼にはもう  
あの場所へ  
行くだけの時間は  
残されていなかった

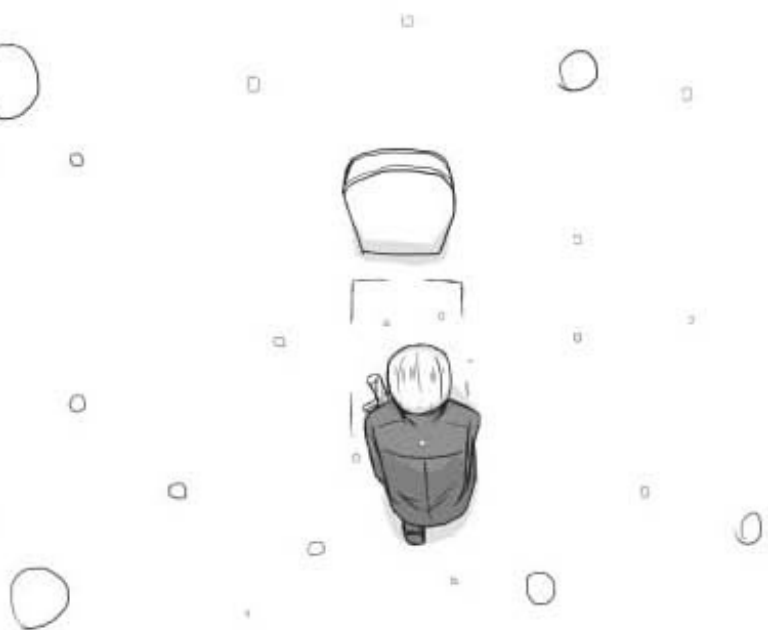


ああ  
またあの方に  
会いたかったよ

とても寒い  
雪の降る日  
だった



彼は墓の前に  
跪くようにして  
座っていた



その後  
家族のいなかった彼は  
名もない墓の隣に  
埋められた

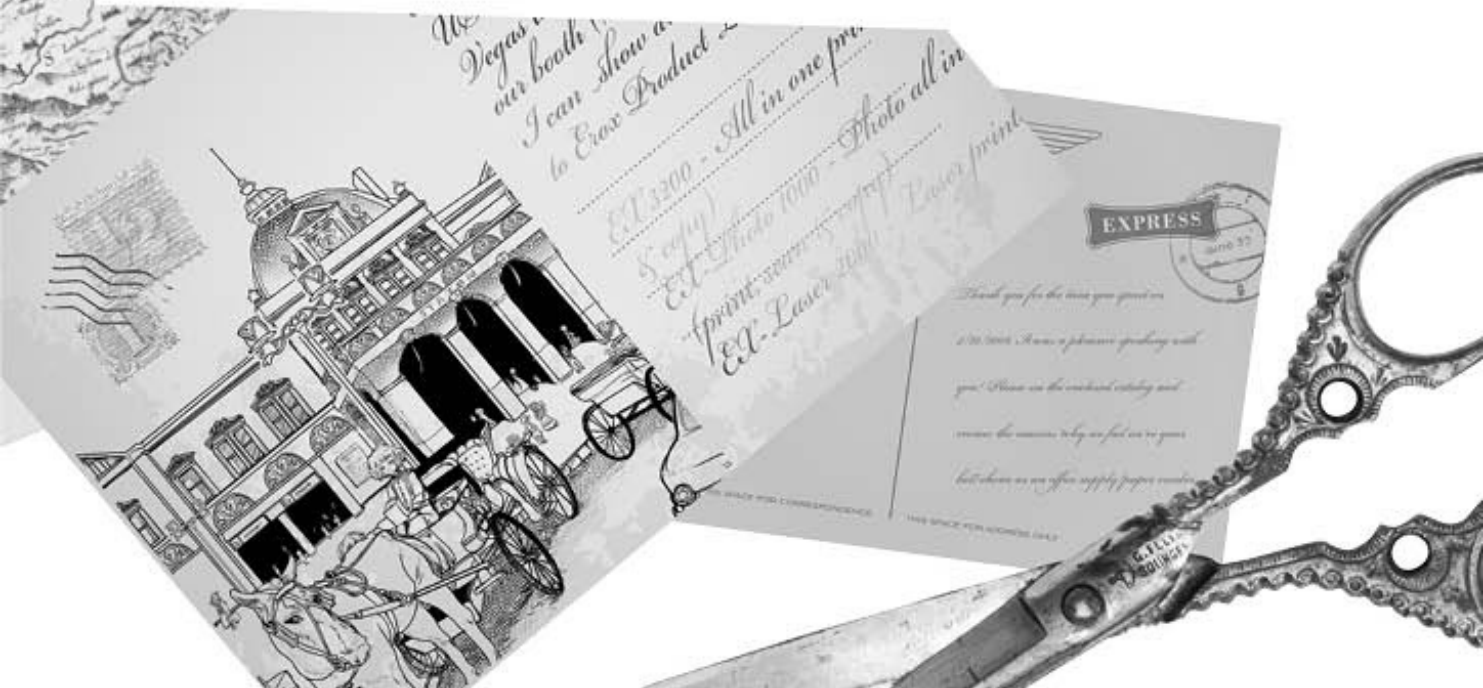




いつも同封しているポストカードは  
ジルさんの文具屋で買っています。

目立たない店ですけど、お茶に纏わる、珍しい文具いっぱい置いてあるんですよ。  
たまに人形みたいに綺麗な子が店番してたりするんです。

今回のカードは、都市中でお祝いしてるリゼ王女様の結婚祝いのポストカード。  
王女様も美人ですよ。(あの子も王女様似です)  
王女様は来年隣国に輿入れするんだそうです。  
なるほどだから街中がいつも以上に賑わってるんだな。  
活気のある街って、いいですよ。





青い花と緑の鳥

木元 ユウ

青い海を見下ろす段丘、そこに巻き付くように這う石畳の路地。

地元の人間しか立ち入らないような場所に、小さな石造りの二階屋がある。

外から覗けるショーケースもないところが、何の店なのかは入ってみるまでわからない。ドアにかかった「OPEN」の木札がなければ、そもそもそれが店だとすらわからないだろう。

商いをする気があるのかなのか、年季だけは感じさせるその店はただ「文具屋」と呼ばれていた。

そのさして広くもない店内、カウンターを兼ねた古い机の上に肘をついて、一人の少女がぼんやりと外を見ている。太陽の光を集めたような金の髪に、穏やかな海の色を写しとったような青い瞳。歳の程は十か少し上か。

身動きしなければ精巧なビスクドールにも見える少女は、しかし大きなため息をひとつ。机にべしゃりと崩折れて、顔の横に置かれた木箱を白い指先でつついた。

ところどころニスの禿げたドアには、中心に細長いガラスが嵌め込まれて、そ

ここから通りの石畳が見える。木の軋む音と共にドアが開き、少女は気だるげに身を起こした。

入ってきたのは見知った顔の青年だった。赤みの強い茶の髪が海からの風に煽られてくしゃくしゃになっている。特に挨拶をするでもなく机に抱えていた本を置き、白いシャツの袖を捲りつつ、青年は穏やかな声で疑問符を浮かべた。

「……あれ、ジルさんは？」

その名前を聞いて、少女の眉間に皺が寄った。音が出るほど乱暴に頬杖をついてそっぽを向く。

「あの中年なら、エヴァを探しにいったわよ」

吐き捨てるような言葉に構わず青年は小首を傾げた。

「エヴァ？ ……ああフラメル婆さんよこの猫だっけ」

「そうよ、おかげで今日も店番。勉強したかったのに！」

まさに憤懣ふんまんやるかたないといった様子ようすの少女は、椅子に座ったまま地団駄を踏んだ。エナメルエナメルの靴が木床を叩くばたばたと可愛らしい音が狭い店内に響く。青年は少女の乱れた金髪を撫で付けつつ器用に肩を竦めた。

「予定なんか立つわけないのはアンが一番良くわかってるでしょ、あの人の辞書にない言葉だよ、それ」

「そうなんだけど！ そうじゃなくて！」

どうやらすっかり機嫌を損ねているらしい、これは話を聞いてやるしかあるまいと青年は苦笑する。机のこちら側に置いてある丸椅子に腰掛け、斜めから少女を見遣りながら、できるだけ優しい声を出す……しかし猫撫で声にはならないように。

「どうしたの、アンヌ＝マリー。何かあった？」

「エル、エルネスト、聞いて頂戴、やってらんないわ！ ジルベールの阿呆がね！」  
少女はぷりぷりしながら、ジェスチャを交えて語りだした。やっぱり話を聞いて欲しかったらしい。

この店の店主であり少女の叔父であり保護者でもあるジルベールは、なんというかダメ人間という言葉をもそのまますらったような人物だ。親のやっていた文具屋を継いだはいいが、まともに商売をするという能力を持ち合わせていないのかそれともその気がないのか、いつもふらふらしている。

街の小さな文具屋には、それでもお得意様がいるというのに「生活費を稼がないとな」などと嘯うそぶきつつ、あちこちで頼まれごとを引き受けては小遣いを稼いでいる。それについては少女も、ちよつとした縁から店番に駆り出されることもある青年も、既に諦めているのだが。

この数ヶ月、ジルベールは昔なじみが開いたカフェの手伝いをしていた。会社勤めを辞め店を開くために貯金のほとんどを使ってしまったという、その昔なじみが礼金を払うと言うのを断り、その代わりに彼の家にあつた古いガラスペンを持ってきたのは、昨晚の事だった。

嬉々として「綺麗だろ」なんて言ってみせられて、この数ヶ月、ジルベールのいない間の店番をしていた少女が激怒した……ということらしい。

「これがそのガラスペン？　綺麗じゃないか」

少女の言葉に同意も否定もせず、青年は机の上に無造作に投げ出されていた木箱を手にして、しげしげと観察した。

軸尻の細工が凝っていて、止まり木に止まった小鳥の姿を模している。鳥の体は透き通った緑で、軸に巻き付いている長い尾は緑から青へのグラデーションを

描いている。どちらかと言えば実用目的というよりは、飾って愛でるために造られたものに思えた。

「報酬がこれだけよ？ お金は？ せめて売れるようなの持ってこいっての！ ガラスペンなんてしゃれたの、うちの客買わないわよ！」

少女はまだ溜飲が下がりがきっていないらしい、胸まである金の髪を解いて乱暴に結び直している。細い髪が痛むのではないかと内心ははらしながら、青年はペンを箱に戻し立ち上がった。

「落ち着いて、アン。紅茶いれるから」

小さな頭の上に軽く手を載せ、店の奥にある簡易キッチンへ向かう。少女は何も言わずまた机に伏せた。

お湯を沸かして戻ってくると、少女はまだ同じ姿勢で不貞腐れていた。年齢の割に大人びている彼女がここまでぐずるのも珍しい。男三人兄弟の末っ子である青年にとって、少女のご機嫌を取ったり構ったりするのは、実は新鮮で楽しい時間だ。

ガラスのポットに茶葉を入れて、上からそつとお湯を注ぐ。ふわりと舞い上がった茶葉の中に青い花卉が開く。乾燥させたコーンヤグルマギクフラワーをブレンドしたこのお茶は、少女のお気に入りだった。

しばし二人でお湯を泳ぐ茶葉と花卉を眺める。花が総て沈む前に取り上げて、縁に銀の飾りがあしらわれた薄手のカップにそつと注ぐ。花の香りがするこのお茶は、最初はストレートで。少女はカップを取り上げ、湯気の香りをかぐ。

「如何ですか？ お嬢様」

二杯目のために砂糖壺を用意しながら青年が聞くと、少女は一口飲んで少し眉を寄せた。

「ちよつと熱いわ、もつとちゃんと私の好みを覚えなさい」

つんと澄ました表情にしかし先程までの刺々しい雰囲気はない。いつもの少女らしさが戻ってきたのに、青年は気付かれないように小さく安堵の息を吐いた。自分も椅子に掛け、紅茶を口にする。

「落ち着いたみたいだね、知ってる？ 青には心を落ち着ける効果があるんだってさ」



「ふうん。エルって大学生よね、そういうの大学で習うの?」

何かの本で読んだ知識を披露すると感心したような視線を向けられた。体が弱かったせいで学校に通っていない少女は、曖昧に頷く青年から木箱に視線を移し、またため息をひとつ。

「ほんとに、こんなのどうしろってのよ……」

「いいじゃないか、君、そういうの好きだろ? きつとジルさんはそれで貰ってきたんじゃないのかなあ」

含み笑いをしながら紅茶を口にする青年をきつと睨みつけてから、少女はつんとそっぽを向いた。

「あのいい加減なおっさんがそんなこと考えるとと思う? ないわ、あるわけないわ。そんな甲斐性あったらあんな年まで独身やってないわよ」

口からぽんぽんと飛び出してくるのは、年に似合わないフレーズ。人形然としたその外見とのギャップに口の端が上がりそうになるのを抑えつつ、青年は殊更ことさら優しい声を出した。

「……アンが一番良くわかってるでしょ、ジルさんがアンのことどれだけ大切に

「してるか」

「煩いわよエル。お説教する気？ そんなやつに売る品なんてないんだから」

その言葉に、青年はやつとこの店を訪れた本来の目的を思い出す。

「申し訳ありませんお嬢様、心より謝罪いたしますので、このエルネストめにインクをお恵み下さいませ」

過剰な演技と共に哀れな声を出す、その金の瞳は明らかに余裕の色を浮かべていて、少女は悔しさ半分でつんけんした声を上げた。

「……自分で出してね、私、お茶を飲むのに忙しいの」

もう半分のよくわからない感情をごまかすために、二杯目の紅茶を入れる。カップに角砂糖を一つ落として、蔦があしらわれた銀の匙でくるくるとかき混ぜる。

「ありがとう」

青年はくすりと笑って、勝手知ったる店内を商品の並べられた棚へと向かう。それを横目で見届けて、少女は木箱からペンを取り出した。

窓から差し込む陽射しに翳すと、ガラス細工の鳥が淡く光るように見える。悔しいし腹立たしいが、確かにそれは少女好みの細工だ。矯めつ眇めつして、ぼつ

りと眩いた。

「……ほんと、こんなの……売れないじゃない……」

コーンフラワーの香りが満ちる店内で、鳥の瞳にあしらわれた赤い石がちかりと瞬いた。





オリジナルフレーバーのこと。

あれから色々作ってあります。組み合わせと相性って難しいです。

あの子が名前を教えてくれたら、フレーバーの名前にしたいのになあ。いつもタイミングを見失って聞けないです。

分からないといえば、ルワダ紅茶図書館の館長のおいしいちゃん。あのひと……人なんだろうか。

何十万という本の海の中で、聞けばすぐに目的の一冊、お茶の香りを導き出してくるんだよ。僕には、どうにも人には思えないよ。



*post card*





紅茶図書館

伊佐雄



ようこそ  
いらっしやいました

ルワダ紅茶図書館へ

私、  
館長の

ベレニツツイと  
もうします

当館は初めてですか？

よろしい

ご覧の通り  
当館は茶の  
博物館で  
ございます

古今東西茶の歴史や

製造方法

そして――

世界中の茶葉が  
当館に収蔵されております

勿論  
飲まれる事も  
可能です







なるほど

世界にただ一つの茶葉  
でございますか……



ほう



よろしい

ふむ



これも当館の  
サービスの一つで  
ございます！

あなた様だけの  
立った一つのブレンド



茶もまた  
探すのです

運命の相手  
というものを



ああ  
ありましたよ



さあこれを持って  
向かいの喫茶店に  
いきなさい

きつと  
気に入るはずですよ

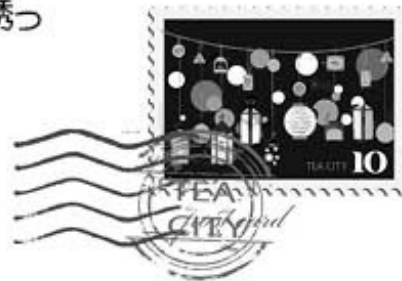
では、  
またのご来館  
お待ちしております





アドバイスに従って、海に行ってみよう! ってあの子を誘ってみました。

僕的には、デートのつもりだったけどあの子からしたら、お茶都市探検の延長線だったかもしれません。



切符を買って海辺まで行ったらマロウティーみたいな、きれいな青い海が一面に広がっていて、彼女大喜びだったのが幸いです。

お茶都市の海辺は絵を描いているお姉さんもいたし、犬の散歩をしている人もいました。

側に居るのにまるでいないみたいに、僕たちお互い何も言わなかった。手を繋いで帰ったよ。

そこにいるって感じることは、大事なことです。





ミルク

沙ク





ボクは なんだかよくわからない部類の

イキモノらしい

シンダ?

いやいや

そもそも 生まれてずっとこんなんで

シヌところか

何百年と生きてますけどネ



コレ、とか



ボクは 一体何なのか

お偉い方にも  
訊きたいけれど  
誰もボクが見えない

ただと  
まれに  
見えるヤツがいる

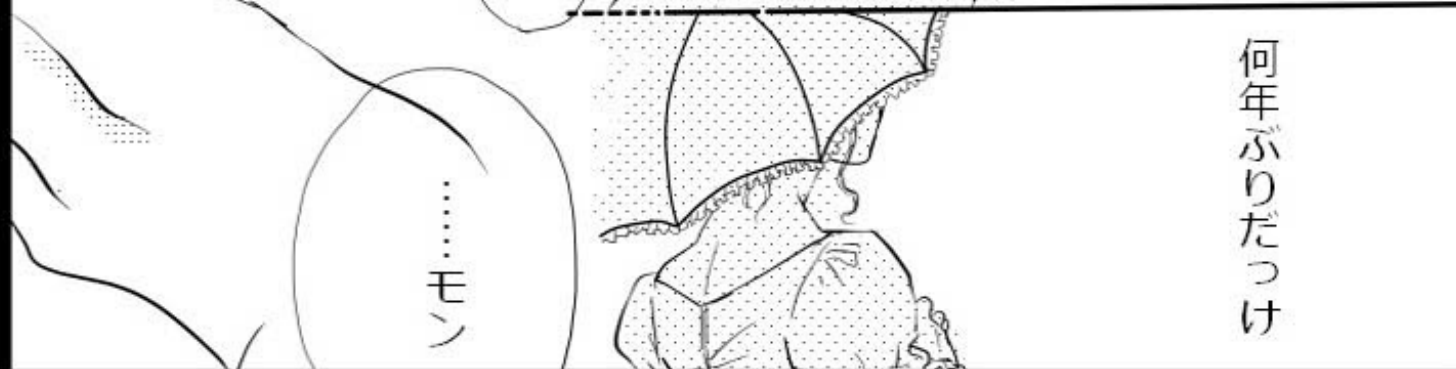


もうちょっとで  
終わるー



誰かと海に来るのは

……



……モン

何年ぶりだっけ





シモンにも  
紅茶 持ってきた



何度も言うけど  
ボクは、



ウェロニカ…

びびった



……



飲食はしない  
だから  
気を遣わないでネ

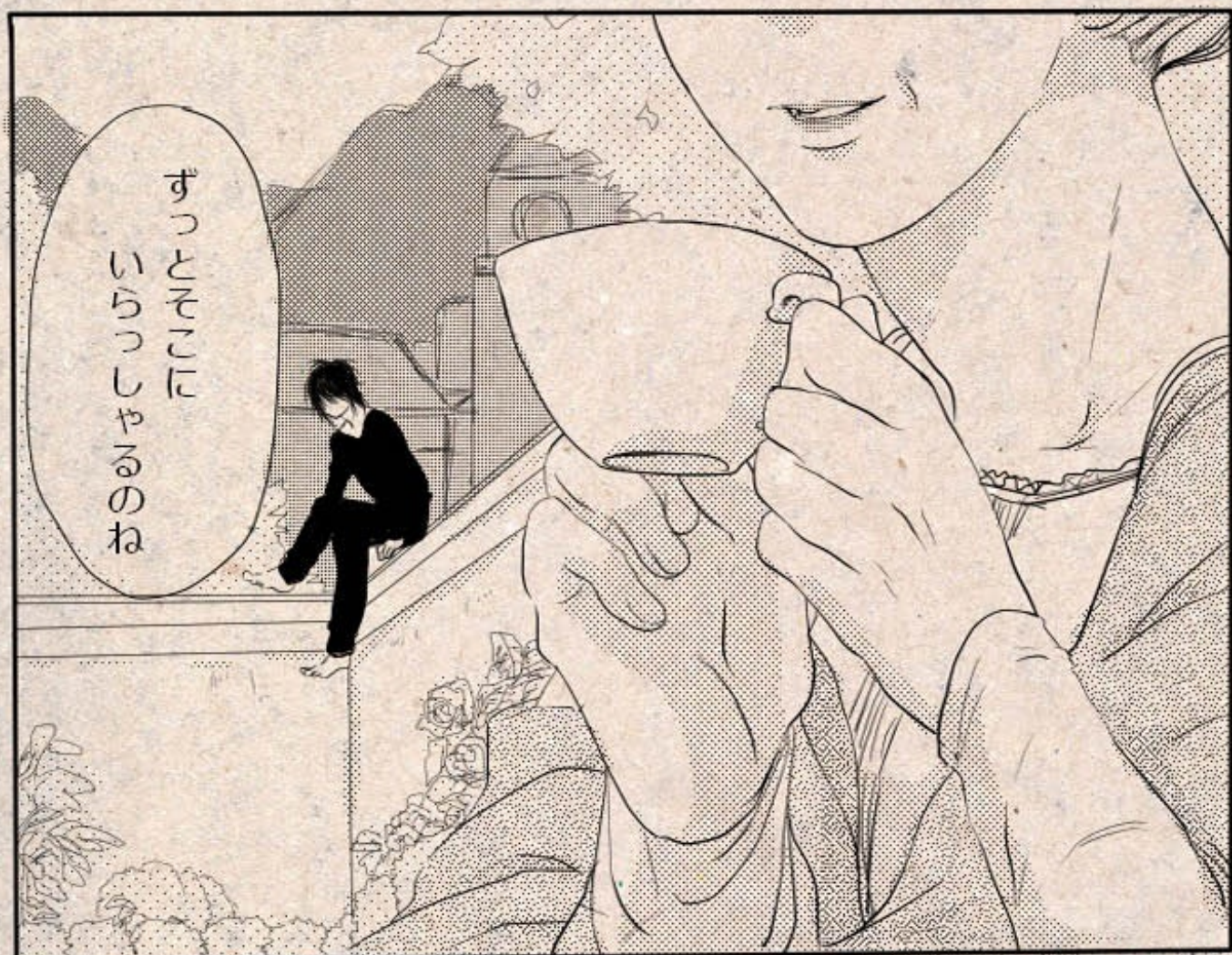
居ないも同然  
なんだから

気なんか  
遣ってない  
ただ、私は

お友達に  
おいしいミルク  
ティを持って  
きただけよ

天使さん





ずっとそこに  
いらっしやるのね

ねえ  
向かいの席に  
お座りになつて？

ミルクティでも  
いかがかしら  
天使さん

何百年とネ  
生きてますが

天使と呼ばれたのは  
これで二回目ですよ

天使……

……まさかネ





この前海に誘ったからか、あの子とぐっと距離が縮まった気がします。

一緒に「ほしのやかた」に行ってみました。  
今は廃墟の天文学資料館で、冒険にはもってこいの場所だって聞いたから行って見たかったんです。

女の子のあの子にはつまらないかと思ったけど  
持ってきたフルーツティーを飲みながら、壊れて空と繋がっている天井を見上げて一番星を見つけた時、あの子すごい嬉しそうでした。

お茶都市の子供たちの秘密基地。  
僕たちの秘密基地にもなりました。



*post card*





星の舟

椎乃 みやこ



同じだから一緒だよと言ったら、同じだから違うと返された。

私の隣にいるのに、見ているところは一緒じゃない。手を繋いで歩けば必ず別のところに行きたがる。砂浜で大きな山を作るのが好きなのに、あの子はその山に穴を開けたがった。最後は崩れてしまって二人で喧嘩することもあった。

私には双子の弟がいる。

双子の弟は、イヨチという愛称で親しまれていた。どういう理由でイヨチと呼ばれるようになったのかは忘れたけれど、イヨチは愛称の響きが気に入っていた。家族や周囲の人たちがイヨチと呼ぶから、自分の本名を呼ばれたときぽかんとしていた。そのくらい、イヨチは深く浸透していたのだ。

イヨチと私はふわふわした髪だ。二人で風船髪と呼んでいた。雨の日は必ず跳ね、風が吹いたらぼさぼさになる。ただ触り心地がいいのか、猫の毛みたいで柔らかいとお母さんに誉められた。

イヨチの髪は紅茶に牛乳を混ぜたような淡い茶色で、私は珈琲のようにもったりとした真っ黒な髪だった。顔立ちはどちらも中性的。男女の違いはあっても、あの頃は小さな子どもだから、周囲の人たちは髪の色で判断していた。紅茶色は

イヨチ。珈琲色は私。

私たちは、そんな双子だった。

イヨチは船乗りに憧れていた。大人になったら大好きなりんごの茶葉を船に乗せて、たくさんの人に届けるのがイヨチの夢だ。夜には空に輝く星を見上げて、本にはない星座を見つけると話していた。

イヨチは引っ込み思案だ。それで船旅ができるのと訊いたらできると断言した。私よりも大きくなって立派な大人になると意地を張った。そのときのイヨチはどこか知らないところを見ているような気がして、なんだか落ち着かない心地がした。

いつも一緒が当たり前だったのに、イヨチはそうではなかったらしい。七歳の誕生日に、イヨチはいなくなってしまった。

海に浮かぶ白亜の島に、ちらちらと雪が降り注ぐ日だった。イヨチはどこにもいなかった。風船髪に薄く雪が積もるまで、港で鼠色の海を眺めていた。

家族は何も教えてくれなかった。この街によくある不思議な現象が起こったかも知れないと言い、尋ねることはできなかった。そのときからイヨチの話は禁句



となった。

きつとイヨチは、船に乗ってしまったのだ。

港に停留する船に興味本位で乗り込んで出発してしまったのかも知れない。そうして異国の地に降り立ち、帰り方がわからずに途方に暮れているんだ。判断が鈍い子だから、帰りの船がわからずに迷っているかも知れない。

あの日から私は港に出向いている。紙で作った舟を海に流すのが日課になっていた。りんごの茶葉を舟に乗せ、帰り道はここだよと教えている。一日に一隻、早朝の海にそっと流す日々が続いた。

あれから六年が立った。

十三歳の誕生日を迎えた冬の朝。郵便受けに荷物が届いていた。小瓶と封筒がひとつずつ。封筒を開くと茶葉の香りがした。茶葉入りの便箋のようだ。便箋を鼻に当ててみると、甘くてほのかに酸味がある懐かしい香りがした。

これは、りんごの匂いだ。

便せんには拙い文字で、こう書かれていた。

『きょうのたんじょうび、いよちがかえってくるよ。そのかぎをつかってほしの

やかたにおいで。ほしのふねにのって、あいにおいで』

小瓶の中には、双葉の形をした小さな鍵が入っていた。寒さで赤色に染まりつつある指で摘み、観察してみる。作り物のようにも本物のようにも見える鍵だ。

封筒の差出人には「ようせいのくに」とある。悪戯とも受け取れるのに、私はなぜかその言葉にひどく惹かれた。

もし、これが本当なら。

また、イヨチと一緒にされる。

私は小瓶も鍵も封筒も全て上着のポケットに詰め込み、走り出した。吐く息は白く、頬に当たる空気は冷たい鋭さを帯びている。朝の時刻になるというのに、太陽の目覚めは遅い。

星が微かに煌めく空の下を駆けて行く。

「ほしのやかた」というのは、丘の上にぽつんと建っている古い施設のことだ。ある老人が星の知識を広めるために建てたらしい。当時は物珍しさに多くの人が集まったそうだが、数年後に建てられた大きなプラネタリウムに人が流れていっ

た。そのうち、真白の円蓋は鼠色を被り、白壁に蔦が覆い、手入れされていた庭に足を踏み入れる大人はいなくなってしまうた。

大人たちに忘れられるようになった「ほしのやかた」は、小さな子どもにとっては格好の遊び場になった。

私もイヨチと何度か「ほしのやかた」に来たことがある。施設の中に入れなくても、伸びた草花を摘み取り、追いかけてっこをして楽しんだ。丘の上にある「ほしのやかた」は本物の星もよく見える。活発な子は木の枝を伝って天蓋に飛び降りていた。寝転がって空を仰げば、星空が見える特等席になったのだ。プラネタリウムとして動かなくなっても、子どもにとって立派な「プラネタリウム」だった。

イヨチがいなくなってから、自然と「ほしのやかた」から足が遠のいていた。六年ぶりに訪れた施設は、あの頃と変わっていなかった。ぴしゃりと扉は固く閉ざされ、カーテンが閉め切られた窓から奥を覗き見ることはできない。

漂うのは、冬の湿気を含んだ匂いと凜とした朝の空気。「ほしのやかた」には、いつも秘密の香りが満ちていた。木製の扉を軽く叩いてみたが、やはり返事はな

い。ポケットにしまった小さな鍵を手取る。おそろおそろ挿してみると、鍵穴はすんなり受け入れた。扉を押してみれば、古びた音を立てる。

埃と黴が混じった人が入り込んでいない空気が溢れ出た。こもった暗さの中に、ほんやりと廊下が浮かび上がっている。試しに声をかけてみるが、しんとした静けさが返ってきただけだった。唾を飲み込み、廊下を突き進んでいく。点々と足跡をつけて辿り着いた先は、木板がぶら下がっている扉だ。

『ほしのやかた』

私は躊躇いもなく、扉を開いた。

海に、飲み込まれた。

海だ。扉から瑠璃色の海水が飛び出してきた。すっぽり包み込まれ、ごぼごぼと沈んでいく。不思議と体は軽く、このまま底に落ちてしまっても問題がないような気がした。

私の前を奇妙な生き物が通りすぎていった。体は透き通っているのに、粒子の

ような煌めきがある。体の線にそって点と点を繋いでいるようだ。牡牛はゆうゆうと歩き、兎は軽快に跳ねていく。大型犬と小型犬が仲良く走っていた。鯨だっている。彼らの存在をまじまじと見つめていると、あることに気づいた。

星座だ。冬の星座の生き物たちが、この海に存在しているのだ。

冬の星は、私たちが一番好きな星空だ。手袋をはめた手で、ひたすら空を指してあの子と探し合っていた。あの頃と同じ、見知らぬ星を探すように海面を見上げた。遠くなりつつある海面に小さな舟が浮かんでいる。こちらを見下ろしているのは、見覚えがある紅茶色の風船髪だ。

咄嗟に名前を呼ぼうとしたのに、海水が私の声を塞いでしまった。

手を伸ばす。二人でいた頃は、大きくなったら星を掴めるものだと思っていた。喉に海水が入っていく。軽かったはずの体が重くなり、さらに下へと沈んでいく。意識が揺らぎ始め、海面に見えるあの子の姿がさらにぼやけていく。

お願い。私をおいていかないで。

飲み込んだ海水は、りんごの紅茶の味がした。

気がついたら、私は舟の上に乗っていた。ゆらゆらと浮かぶ舟は紙でできてい

る。舟には木箱がぼつんと座っていた。蓋を開ければ、あのりんごの匂いが広がる。敷き詰められたりんごの茶葉に、鼻の奥がつんとした。

これは、私が送り続けた舟だ。

見渡してもあの子の姿は見当たらない。人もいなければ陸地もない。墨色を塗りたくった世界がどこまでも続いている。瑠璃色の海面を覗けば、私の顔が映った。珈琲色の髪の毛は小さな頃より伸びている。ニキビがいくつかできて、顔がふっくらとしてきた。

変わらないと思ったはずなのに、私は確実に「女性」になってきている。

そのうち視界が滲んで、海面の私はぼろぼろと涙を零していた。涙が落ちるたびに静かな海面に波紋ができる。私の顔が崩れたとき、珈琲色が紅茶色になったような気がした。

「イヨチー！」

私は叫んだ。大好きな片割れ名前を呼んだ。聞きたいことは山ほどあるのに、叫んでいた。

あのととき呼べなかった名前を、ようやく呼ぶことができた。

海面にはイヨチが映っている。紅茶色の風船髪が、同じように舟の上からこちらを見ていた。あの頃と変わらない中性的な顔。だけど、私は大人になってきている。そのどうしようもない事実には私の声は震えていた。

「ごめんなさい。気づけなくて、ごめんなさい」  
忘れていたのではない。

ただ、「そういうこと」にしておきたかった。

イヨチが「ようせいのかくに」に行ったことにして、海に沈んだなんて受け入れられなかった。

七歳の誕生日に船を観に行った。港でほんの目を離れた隙に、イヨチは海に落ちこちてしまった。私は気づかずひたすらイヨチを探していた。引き上げられた体をぼんやりと眺め、風船髪に雪が積もるまで港を見つめていた。

「イヨチ、ごめんね。私、大人になってきてるよ。もう一緒じゃなくなっちゃっているよ」

謝罪の言葉を吐く私に、何か思いついたのかイヨチは笑顔になった。

「りゅうこつ座って知ってる？ あの星座が持っている赤い星はとても綺麗な

んだ」

私が泣いたときいつも笑ってくれた。イヨチはそういう子だった。「それ、あげるから。待ってて」

イヨチの舟が離れていく。止める言葉を叫ぼうとして飲み込んだ。「うん、待ってる。だから、行ってきて」

見送りの言葉に、イヨチは大きく手を振った。

私はプラネタリウムにいた。

「ほしのやかた」だろう。ぐるりと円上になった客席に、中央に佇む天体投影機。私は動かないプラネタリウムの客席に座っていた。

自分の手にティーカップがある。それはりんごの紅茶だった。

紅茶に赤色の光が灯ったように見えた。

「カノーパス」

紅茶を啜り、私は笑う。

りんごの紅茶は、いつもより苦い味がした。





お茶都市はパン屋が 30 店舗もある!

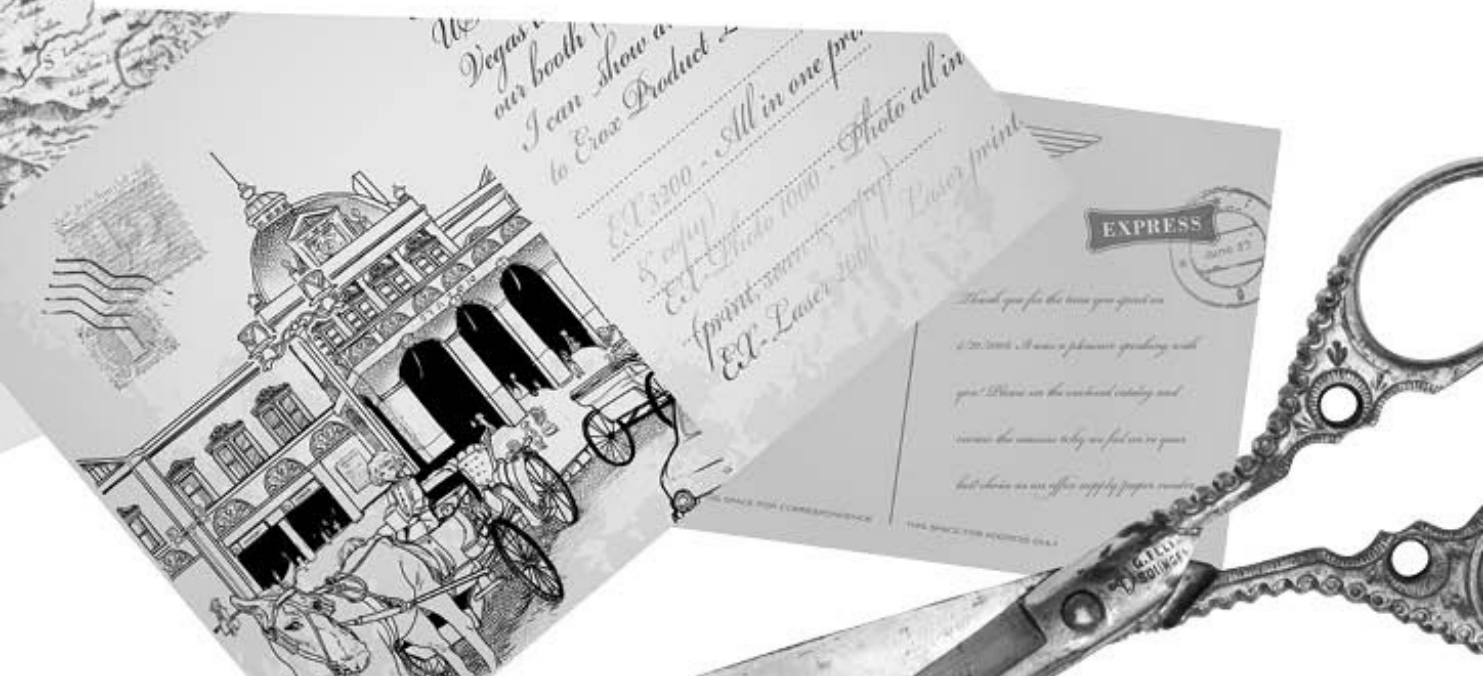
街のひとたちがお茶と一緒にケーキやスコーンを必ず買えるように、定休日も地区ごとに決まってるくらいなんですよ。



今一番の話題は、魔法使いのお茶スコーン。

この前言ってたお茶と一緒に食べるとびっくりするくらい美味しいパン屋の新作なんです。外側はカリカリ、中はフワフワ! クリームをのせるとまるで天国のスコーン!

魔法使いにレシピを教えてもらったんだろうなって、納得するおいしさです。





ファミリー

鳴加

Boulangier



シャイオンは、ポットから慎重に茶を注いだ。湯に広がったのは綺麗な緑の――森の色だ。

「またこの色か……」

シャイオンは、ため息と共に呟いた。

彼が使った茶葉は、自分が見たい色に染まるという、何とも不思議な茶葉である。

師は、この頃シャイオンがこの色ばかり出すことが不満らしい。

だが淹れたものは仕方がない。貴重な茶葉を無駄にするわけにもいかず、シャイオンは書物の山の向こうに居るのである。師に向かって叫んだ。

「デューオ様！ お茶が入りました！」

すると目の前に突如、師が姿を現した。

「家の中での瞬間転移魔法は、心臓に悪いから止めて下さい！」

「うるさい奴だな。私の勝手だろう」

ふんぞり返る師は、せいぜい十歳ぐらいの少年にしか見えない。実年齢は皆目不明だが、今年二十歳になって姿も年相応なシャイオンと並ぶと、もちろん師と

弟子には見えなかった。

師は白色の髪をしており、シャイオンは対して漆黒の髪を肩ぐらいまで伸ばしている。二人並ぶと対照的なこと、この上ない。

「ふむ、またこの色か。——お前はそんなにホームシックなのか？」

指摘を受け、シャイオンの浅い緑の目に動揺が走る。

「い、いえ」

しかしこの茶の色が、故郷・エルアーージュの名高き深き森の色であることは明白すぎる。

「この味が好きではあるが……さすがに続けて飲むのもな。他に見たい色はないのか？」

「うーん」

先日の一時的な里帰りで、あの緑が鮮烈に頭に残ってしまったのだ。しかもこのところ茶を淹れたり雑用をしたり魔法の特訓を受けたり、という日常が続いていてあの緑を凌駕するような刺激がない。

「他に茶葉はないんですか？」

「ない」

シヤイオンの世界では、茶葉で魔力を補う。つまり魔法使いはいくらでも茶葉を必要とするわけで、必要以上には茶葉を所蔵出来ない仕組みになっている。

それは世界一の大魔導師である師も、同じである。同時に持てるのは二種類の茶葉のみで、量も限られる。

「ちよūdと買い足す時期だ。珍しい茶も飲みたいし——お前、ちよūdと良いから異世界に行つて来い」

「異世界ですか!？」

師ほどの魔導師なら異世界渡りは珍しいことではないらしく、小旅行気分のままに行っているが、シヤイオンは異世界に行ったことは今まで一度しかなかった。それも師と一緒にだ。

「安心しろ、送つてやる。帰りはこの腕輪を三回擦るが良い。世界渡りの魔法が発動する」

ぽいっと無造作に投げられた銀色の腕輪を、慌てて受け取る。

通常は、この魔法を使うには長たらしい呪文が必要だが、高位精霊と契約済の

師には一つ二つの言霊があれば良い。

「この者を渡せ」

そうしてシャイオンは飛ばされた。

がん、と石畳の床に額を打つ。

「あいたたた……」

手をついて起き上がると、大きな目が視界に飛び込んで来た。

「うわ!？」

思わず飛びのいてしまったが、前方に居るのは五歳ほどの少女だった。ホッと胸をなでおろす。

茶色い髪を二つくくりにした彼女は、かわいらしく小首を傾げた。

「◎T▽T?。」

理解不能の言葉を口に出している。

ここが異世界であることを思い出し、シャイオンは杖で頭を叩いた。  
がん。

「あんさん、なずした？」

惜しいが、失敗だ。もう一度、思い切り頭を叩く。

ごん。

「ΣΣΣΣΣー！」

もつと酷い。もう一度叩く。

がごん！

「お兄ちゃん、だいじょーぶ？」

「あ、ああ……」

頭は痛いけどね、と付け加えてからシャイオンは立ち上がったが——すぐにふらついてしまった。

「……言語魔法を使いすぎたな」

言語魔法は地味に見えるが高等魔法であり、魔力の消費は凄まじいのだ。

「げんごまほー？」

「話すと長くなるんだけどね……とりあえず」

何とか真っ直ぐ立ち、シャイオンは少女の目を見つめた。

「この辺りで、お茶を飲めるところを知らないか？」

少女はリズと名乗った。

彼女に案内されたのは、何とパン屋だった。

まさかパン屋に連れて行かれるとは思っていなかったため、シャイオンは戸惑いがちに店内を見渡した。

「ここ、わたしの家。——ママ、この人、いきだおれ！」

少女の説明に脱力したが、否定も出来ないところが辛い。

「何だって？ お医者様呼ぶかい？」

「いえ、お茶をいただけたら回復するので」

「はあ？」

異世界の者からすると、お茶狂いにも見えるのだろうか。だが幸い、パン屋の女は追及しなかった。

「……変な人だね。じゃ、ちょっと待っててね。ここで飲むかい？」

「は？ はあ」



「じゃあそこに座っておくれ」

店内には、小さいテーブルと椅子があった。長身を折り曲げるようにして、そこに座る。しばらくして、パンと白いカップが運ばれて来た。

「私は、パンは頼んでいませんが……」

「ああ、良いんだよ。食べておくれ」

「そうですか。それでは、有り難くいただきます」

紅い茶を口にふくむ。癖のない味だった。そこでパンに手を伸ばして、千切る。わくわくと、リズが見守っていることに気付いて苦笑する。

パンを口に入れると、シャイオンは思わず目を見開いた。もう一度、紅茶を飲んでみる。

「これは……」

どちらも一つだけならば、地味な味だろう。だが二つ合わせると何とも言えない甘みと、芳醇な香りが広がるのだ。

「これは美味しい。珍しいパンと紅茶ですね」

「気に入ってもらえて良かった。それは、紅茶に合わせて作ったパンなんだよ」

「紅茶に合わせて？」

「ああ。あたしの夫は行商人でね。その茶葉を安値で仕入れて来たんだが、味に癖がなさすぎて紅茶単体じゃちつとも売れなかったんだと。そこであたしが、その紅茶に合わせたパンを作ってみたんだよ」

女の説明に、シャイオンは納得して何度も頷いた。

「なるほど！ いやはや、これは素晴らしい。セットで売っているのですか？」

「ああ。買うかい？」

「もちろん！」

いそいそと財布を取り出して、中を覗き込む。

「あの、これでよろしいですかね」

金貨を差し出すと、女は仰天した。

「良いってよりも、多すぎるよ！」

「遠慮なさらずに」

この世界の通貨は持っていない。幸い金はほとんどの世界で価値が高いらしいので、異世界で買い物をする時はこうして金貨を差し出すのだった。

「これじゃ、全部売れちゃうね。パンを焼かないと」

「いえ、そんなに食べられませんし……」

量の交渉をし、パン十個と茶葉十杯分に決まった。

「一個でも売れて良かったよ」

女の台詞に、シャイオンは眉を上げた。

「一個でも？ そんな、こんなにも美味しいのに売れていないのですか？」

「ああ。何せ、紅茶とパンがセットじゃないとその味は出ないからね。高く見えるんだろう」

「なるほど……」

合点はいったが、シャイオンは首を傾げた。

「勿体ないですね。またここに来たら、絶対に買いに来るぐらい美味しいのに」

「しょうがないさ。あんたに売るので最後だね」

女はため息をついて、片付けがあると言って奥に引っ込んでしまった。

「おにーちゃん」

膝にリズがよじ登って来た。

「あのパンとお茶、美味しかったでしょ？」

「うん。君も好きなんだね？」

「大好き！ でももう、作ってもらえないんだなあって思うと……」

リズは目に見えて、しょんぼりしてしまった。

「パパとも、お別れかあ」

「どういうことだい？」

「んー、パパとママ……離婚するかもって」

気丈にも顔を上げていたが、その目は涙に溢れていた。

「え？」

「多分、パパがお仕事で家に全然帰って来ないせい……。あのパンを作り続けるなら茶葉を届けてくれるから、また会う時間が増えて離婚しなくなったかもしれない……」

シャイオンは絶句してまだ少し残っている、赤い水面を見下ろした。

これは、絆でもあったのか。

「——大規模な試食会を、したらどうだろう？」

「試食？」

「そうそう。町の広場とかでお茶を淹れて、パンと一緒に飲んでもらうんだ」

「みんな食べてくれるかなあ」

不安そうな少女の目を見据えて、「大丈夫」とシヤイオンは言い切った。

広場にはたくさん人が居たが、屋台も多かった。

「こりゃ、人を惹き寄せる何かが必要なあ」

普通に呼び掛けても良いが、自慢ではないがシヤイオンはそういうことには向いていなかった。

どうせなら、と魔法を使うことにする。

シヤイオンが手を叩くと、どこからか青い鳥が現れた。綺麗な声で歌い、人々の注意を引く。

「パンの試食はいかがですかー！」

人々の目が向いている内に、リズと母親が呼び掛けた。

結果は——大好評で、予約をたくさん受け付けることになった。元々、味は申し分ないのだ。必要なのはきっかけだけだった。

「ママ、これからもあのパンを作れるね！」

リズは喜んで前を走って行く。

呆然とした様子の女の肩に、シャイオンは手を置いた。

「あの……出過ぎた真似をしましたか」

「何で、そう思うんだい？」

「あなたが、試食を考え付かなかったとは思えないので。元々、売るつもりがあまりなかったのかな、と」

「……参ったね、見透かされてたか。確かに、あの茶葉を仕入れるようになったら、夫との時間は増えるさ。でもそれは、焼け石に水にしかならないと思ってたんだよ」

女が足を止めたので、シャイオンも立ち止まった。

「それで、どうするのですか？」

「もう少し、考えてみるよ。あの子があんなに訴えるのを聞いて、あたしは自分

が恥ずかしかったね。あたしは自ら、絆を諦めようとしていたんだ」

彼女はふわりと、温かく微笑んだ。

「ふむふむなるほど。これは美味だ」

師も、シャイオンが持ち帰った茶とパンに大満足のようだった。

「これはまた買いに行かねばな」

あつという間に茶とパンを平らげ、師はシャイオンに例の不思議な茶を淹れるように命じた。

今回湯に浮かび上がった色は、薄い赤茶色だった。温かなその色は、パンのようでもあり紅茶のようでもあり――。

「ふむ。何の色だろうな？」

師は小首を傾げた。

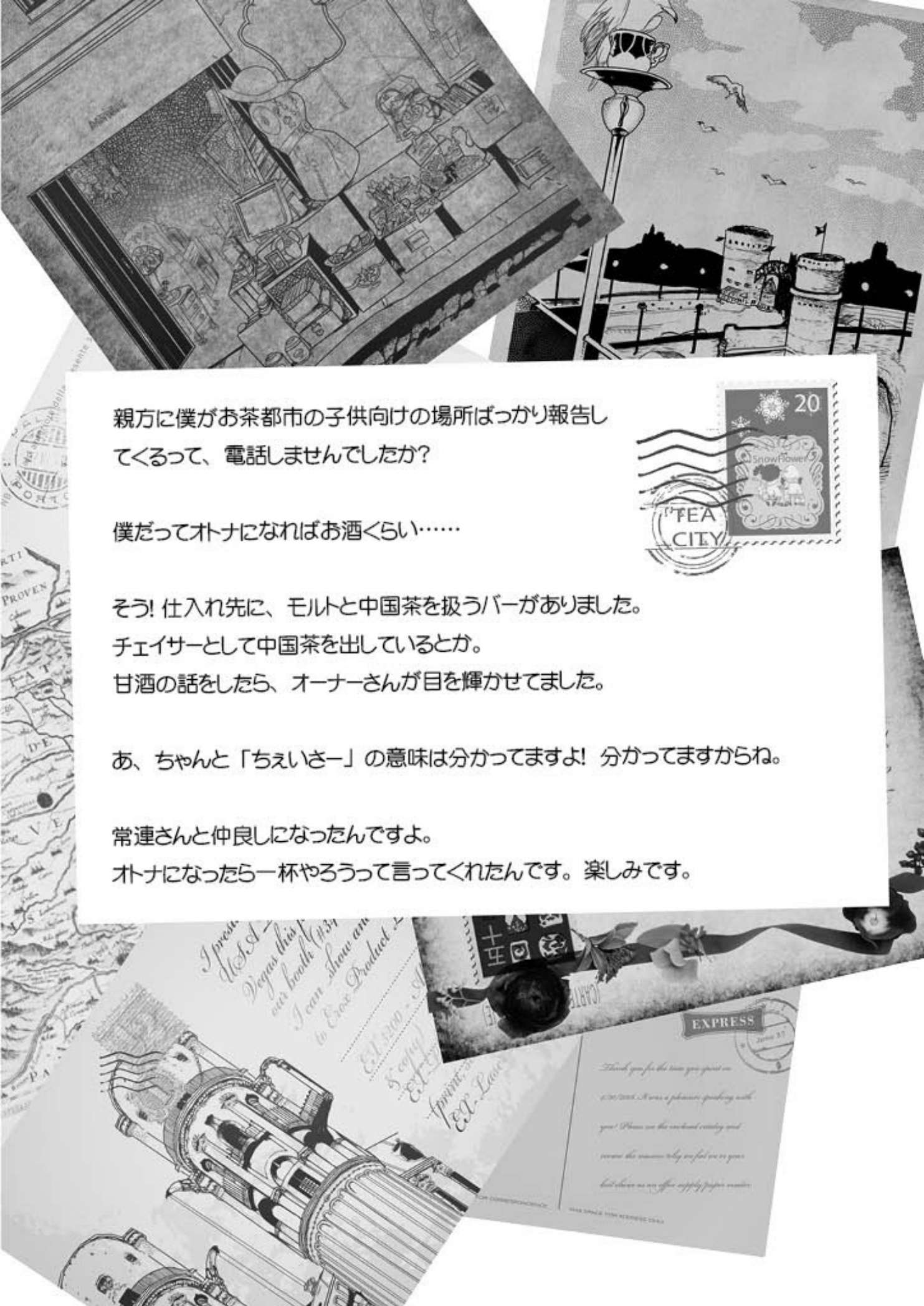
「ああ、きつとこれは」

父親が遠方から仕入れた茶葉、それに合わせるように作った母親のパン、それらを諦めさせたくないと願った少女の想い。

「家族の、色でしょう」

どうか、また訪れた時にもこの色が見れますように。





親方に僕がお茶都市の子供向けの場所ばかり報告して  
くるって、電話しませんでしたか？

僕だってオトナになればお酒くらい……

そう！ 仕入れ先に、モルトと中国茶を扱うバーがありました。  
チェイサーとして中国茶を出しているとか。  
甘酒の話をしたら、オーナーさんが目を輝かせてました。

あ、ちゃんと「ちえいさー」の意味は分かってますよ！ 分かってますからね。

常連さんと仲良しになったんですよ。

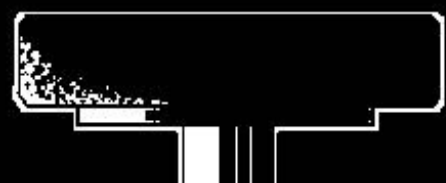
オトナになったら一杯やろうって言ってくれたんです。楽しみです。



BAR

白象正雪









エンミー茶園で同業者に会いました。

シエスさんちの、ほむろっていう女の子ですけど覚えてますか？ 偶然町中で出会って、なぜか逃げられました。

とっ捕まえて話を聞いたら、お茶都市の農園に紅茶の仕入れに通っているって聞いて驚きました。

人見知りのほむろも、僕みたいに修行してるんですね。

一緒にいたあの子は、ほむろと話をしていたらなんか不機嫌そうな顔をしてきて、説明に困りました。女の子って難しいです。

でも結局三人で仲良くエンミー茶園覗いてきましたよ。

僕も店を切り盛りできるようになったら、仕入れに行きたいな。



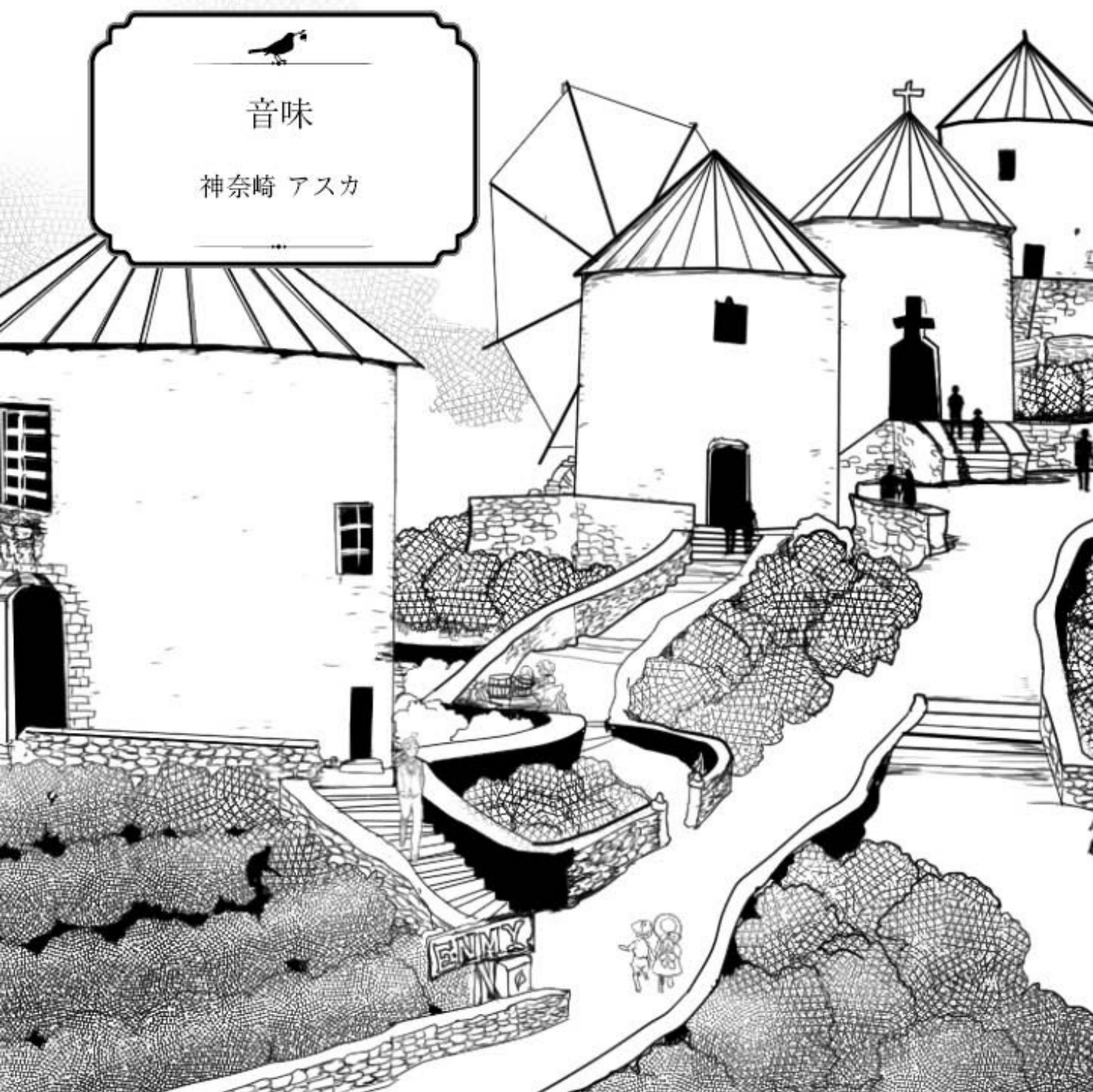
post card





音味

神奈崎 アスカ



とある世界のとある紅茶屋は、扉一つで様々な世界へ行けるといふ。店内から扉を見つめ、少女は小さく息を呑んで、恐る恐るドアノブを握った。

頼まれたのは、店のお得意先である茶園からお茶を貰いに行くといふ、ただそれだけ。なのだが、道を歩くほむろの顔は強張っている。握りしめている紙は手の汗を吸いこみ、書かれている地図を読む分には支障がないが少しよれている。

この道を、真っ直ぐ、真っ直ぐ——黒い目で進む先を捉えながら、歩く。手にさげている籠の鞆が、何も入っていないからだろう、頼りなさげにふらふら揺れた。

訳あって、生まれてから今まで一人で外出することが殆どなかった。諸事情で紅茶を中心に売る店で働き始めることになったが、まさか一人で外に出るようになるとは、微塵も思っていなかった。頼みごとをされた時は足が竦んだものの、他の店員たちに後押しされ、今に至る。

街の大通りを抜けると、周りが一変する。建物はまばらで、街中よりもうんと緑が増えている。だが、増え過ぎてどこをどう行けばいいのやら。と、前方から

歩いてきた小柄な初老の男性に声をかけられた。

「お嬢さん、君がシエスさんの言っていたおつかいの子かい？」

日に焼けた顔をくしゃりと和らげ、その人は問う。シエス、というのはほむろの働いている店の店主だ。肯定するかのように大きく頷けば、男性は「こっちへおいで」と手招きをする。

「案内するよ、お嬢さん。私が、『エンミー茶園』のオーナー、トートだ。……といつても、さほど大きくない茶園だけどね」

最後を小さな苦笑で締めくくり、トートは手を差し出す。一瞬何かと目を瞬かせたほむろだったが、運よく回路が繋がり、それが挨拶の握手を求めているのだと理解した。慌てて、両手で握ってしまう。

「ほっ、ほむろです！ よろしくお願いします！」

栗色のボブヘアを振り回すように、ほむろは頭を下げた。そんな彼女の言動に驚かされたのか、今度はトートが目をぱちくりとさせていた。

エンミー茶園には昔、小さな教会があったという。都市の発展と共に忘れられつつあったこの地は、偶然にも教会周辺の土壌が茶葉を育てるのに適していると



いうのが分かり、茶園が生まれた。——という一連の流れを、出かける前日までに店主から聞いている。頭の中でそれを思い出している間にも、ほむろは小さな茶園の中に建っている建物の中へと案内された。教会そのものが既にないと思っただけに、驚く。だが、驚きは教会に入ってから更に大きなものとなった。

入ってすぐ階段を下りれば、地下から地上へと吹き抜けになっており、ステンドグラスから太陽の光が入り込んでいる。そして、色付いた光を浴びている大小さまざまなパイプ。

「パイプオルガンを見るのは、初めてかい？」

初めて聞く名称だ。素直に頷けば、トートは説明してくれた。だが、音楽や楽器に対して疎いほむろは、それが巨大なピアノとしか捉えられなかった。

『『エミリーの音色』はな、このパイプオルガンの音を聞かせることによって出来るんだよ』

誇らしげな声を聞きながら、ほむろはトートの後を付いて行き、パイプオルガンの前へと到着する。貰う予定の茶葉の名前も、既に聞いている。甘く柔らかな味が印象的で、リピーターも多い、ということも。

パイプオルガンの前には、何かが入っている麻の袋が幾つかと、椅子と机が置いてある。座るよう促され、ほむろは籠の鞆を足元に置いてから座る。これからどうすればいいのか全く分からず、自然と体が固まってゆく。そういえば、どうすればいいのかわかれていない。

「——あら、随分とお若い買手さんだこと」

「シエスさんのところからのおつかいさんだよ」

どこからか、女性の声が現れた。綺麗な紅色の入ったグラスを乗せた盆を持ち、白髪交じりの髪を束ねている女性は二つのグラスを机の上に置く。グラスにささっている太いストローが揺れた。よく見れば、グラスの下に何か沈んでいる。

「まあ。遠路はるばるお疲れ様」

にこりと笑いかけられ、ほむろは反射的に首を大きく横に振った。その様子に女性はきよとんとしたが、すぐに笑顔に戻る。

「ここのお茶を水出しして、氷代わりにシャーベット状の白桃を入れてみたの。——ねえ、どうかしら、あなた」

女性はトートに問いかけ、彼はグラスに入っている白桃入りの紅茶をストロー

で吸い上げた。

「味はいけるな。ただ、太いストローがな……」

「そのことなら大丈夫よ。これは夏の来賓用、っていうイメージで淹れてみたから」  
「そうか。なら、いいだろ」

どうやら、この二人は夫婦のようだ。が、何の話をしているのかほむろにはさっぱりである。

「あの……」

「ああ、ごめんなさい。たまに、いいアレンジはないかしら、って二人で探しているものだから、つい」

女性にやんわりと言われ、更に「さあ、貴女も飲んでみて。喉も渴いているでしょう?」と言われたからには飲む他ない。太いストローに口を付け、飲んでみる。白桃が入っているからか、随分と甘く感じられた。

先程、女性はこの紅茶を『ここのお茶』と言っていた。確認したくなり、ほむろは口を開ける。

「あの……」

「なんだい？」

「このお茶、ということとは……えっと」

だが、緊張したのか不自然に言葉が詰まり、しかも次が出ない。だが、トートはほむろの言いたいことが分かったらしく、「ああ」と納得の声を洩らす。

「そうさ、ほむろさんが今からお店へ持って帰る予定の『エミリーの音色』だよ。お味はどうかかな？」

「おっ、美味しいです！ その、紅茶がこんなに美味しかったとか知らなかったから——」

そこまで口を滑らせ、己の失言に両手で口を押さえた。茶葉を売る店の店員が、こんなことを言っては流石にいけない筈だ。案の定、茶園の夫婦は目を点にさせている。

実はほむろ、紅茶の苦味が得意ではなく、自分から進んで飲むことも少ない。なので、先程飲んだお茶の美味しさに素直に感動したのだ。これなら普段も砂糖を入れれば飲みそうだと、と思えたほど。だが、目の前の茶園夫婦はその様なことを知らない筈だ。

「あ、あ、あ、あの、その……」

完全に、失言だと理解した。顔を青くさせるほむろだったが、ふいに夫婦はくすくすと笑い声をあげはじめた。

「美味しいと言ってもらえただけでも、作った甲斐は充分、いや十二分にあるよ」満面の笑みでトートが言い、夫人もそれに続いて「ええ」と、にこやかに言う。どうやら、彼らはほむろの発言を違う意味で捉えたようだ。なるべく悟られぬよう、ほむろは肩の力を抜く。

「音味が効いているのかもね」

「音……味、ですか？」

夫人の一言に、ほむろは気になって問う。

「そうよ。音が茶葉に沁み込んで、音を聞かせる前よりうんと美味しくなるの。どうしてか、って言われると、私もよく分からないのだけれど」

楽しそうに夫人が告げる横で、トートが「お前が弾くからだ」と、ストローを啜えながら横やりを入れた。瞬時に、夫人が頬を赤らめる。

「もう、あなたったら」

「なんだったら、このお嬢さんに一曲披露したらどうだ？　実際どんな曲を聞かせているか、知っている方が何かといいだろう？」

「ええ、確かにそうね」

夫人は少しはずかしそうにしつつ、その場を後にする。夫婦のやりとりを半ば呆然と見ていたほむろに、トートは声を擧げて言う。

「ああまで言わないと他人の前では弾こうともしないんだよ、あいつは」

「そ……そうなんですか？」

「ああ、そうさ。昔っからああでな、茶園にあいつの名前を入れようとしたら反対されるし、商品に付けようとしたらまた反対されてな……」

「そう、だったんですか」

「けど、商品には強引に付けてやった」

そう言って笑うトートが、悪戯を成功させた子どものように見えた。

「それじゃあ、トートさん。エミリー、っていうのは……」

「そうさ、あいつの名前だよ」

トートがほむろの答えを認めたのと同時に、大きな音が室内に充満した。大き

いが、とても柔らかい音で、ふかふかの布団に包まれているような気分になる。こんな気持ちのいい音楽を聞いて、ここのお茶は美味しくなるのか。不思議だと思ったが、改めて『エミリーの音色』を飲んでみると何故か納得してしまう。甘くて、柔らかくて、今流れている音色と同じだ。音楽が終わるまで、ほむろはその音色に浸った。

曲を聞いた後は、本来の目的である紅茶葉を貰う作業に入った。この部屋の中にある麻袋に、空気が入らないよう密閉された『エミリーの音色』が入っており、ほむろはトートから麻袋ごと預かる。がらんごろん、缶のぶつかり合う音を少し立てながら、持って来ていた籠鞆にそれらを入れる。

「お金は、既にシエスさんから貰っているから大丈夫だよ。後は、それを持って帰るだけ」

「はっ、はいっ！」

これで、任務は完了だ。嬉しくなり、ほむろから自然と笑みが零れた。だが、それはここでの空間と、茶園の夫婦との別れでもある。不意に寂しさが胸をしめつけ、消えない。

「あの……トートさん」

立ち上がり籠鞆を両手で持ちながら、ほむろはトートと、そして横に並んでい  
るエミリー夫人を見る。

「また……お茶を貰いに、来てもいいですか？」

「勿論いいさ。なんだったたら、曲を聴きに来るだけでもいいんだよ？」

「……勝手に決めないでくれませんか？」

小さくエミリー夫人が呟くが、嫌そうには見えなかった。嬉しくなり、ほむろ  
は勢いよく頭を下げてお辞儀をした。

「ありがとうございますっ！」

その動作に驚いたのか、夫婦は目を見開かせた。だが、次には柔らかな笑みに  
変わる。それがまた、ほむろにとっては嬉しかった。

こんな素敵な出会いと音色、そして美味しいお茶があるのなら、一人で外に出  
たって怖くなんか無い。



下町の教会に行ってきました。

持ち寄りの日だったから、色んな人と話しながらご飯  
食べました。あの子も初めてだったみたいで、戸惑っ  
てたけど、途中からはすっごく楽しそうでした。

僕もみんなと一緒にいたにぎやかな時を思いだせて楽し  
かったです。

下町だけあって、お茶を生かした家庭料理がいっぱいありました。  
色々教えてもらったよ。

このところ、あの子に元気がなかった理由を聞いてみたよ。  
僕のが好きだって。

僕も君が好きだよって言ったら、あの子泣いちゃったんだ。

あの子はすぐにお茶都市を经って、隣の国へ行ってしまっただって。





# 十字の香

吟子 あゆる



パイプオルガンの音が足元にやわらかく響く。外国の知らない曲だから、楽譜があっても茉莉は歌えない。この国に越してきて半年。インターナショナルの高校に通い、言葉に不自由はないが、初見で歌えるほどでもない。

周りが歌っている中、茉莉は黙って辺りを見渡す。木の床。白い壁。入ってくるときに見た外壁も砂糖菓子のように白かった。自然光が間接的に空間を満たす。わずかに高くなっている正面の壇。その斜め右上高くに、金の十字架が輝く。

美しい、と茉莉は思う。音楽も、建物も美しい。確かに美しいが、ここは本来茉莉と縁のない場所である。日曜の朝にわざわざ早起きして教会の礼拝にゆくなんて、とても損をした気分だった。

歌が終わり、祈りの最後、一斉に「アーメン」と唱えられるのを茉莉はぼんやりと聞いていた。

「ヨハネの福音書十章一節から……」

聖書の朗読の段になって、告げられたページとプログラムを頼りに分厚い聖書を繰った。

「大丈夫？　ヨハネは後ろの方よ」

慣れない手付きの茉莉に気づいたようで、隣の女性が代わりにさっと開いた。

「……ね」

長い指が、ちょうど朗読されている場所をなぞる。

「……ありがとうございます」

小さく礼を言うと、彼女はにっこり笑って自分の聖書に視線を落とした。

メモ帳とペンを取り出し、朗読していた箇所を書きとめてから茉莉は息を吐く。学校の宿題なのだ。茉莉の通うインターナショナルスクールがキリスト教系の、母国で言うミッシェンスクールだったからだ。課題なのだから仕方のないことである。

スーツ姿の、三十代くらいの男性が壇上にあがり、茉莉はそちらに目をやった。

「みなさんおはようございます。今日の箇所はよく聞くとところだと思えますね」  
話しぶりからして牧師のようだ。

「今日のポイントは三点あります。第一に主はわたしたちの名を呼んでおられる、第二に……」

あいさつと前置きの後に本題に入ったが、これならメモが取りやすそうだと茉

莉はペンを回した。退屈なものには変わりはないけれども。

礼拝が終わって腕時計を見ると十一時半を指していた。お昼には少し早いですが、朝食が早めだったのでお腹は空いている。荷物をまとめながら、どこで食べて帰ろうかとお店とメニューを思いめぐらせていると、肩を軽く叩かれた。

「こんにちは。あなた教会は初めてなの？」

先ほど聖書を開いてくれた女性だ。グレーの髪が肩のあたりではねている。大学生くらいに見えるが、外国人の年齢を外見で判断するのは難しい。

「はい。『学校のレポート』で。学校で渡されたりリストにこちらの教会があったので」

さりげなく「レポート」を強調して答える。あらそれは大変ね、と彼女はゆるく笑って手を差し出す。

「そういえば、名乗っていなかったわね。ごめんなさい。わたしはマリー・ブランジェ。歳は十七」

茉莉は一瞬固まってからにっこり笑って握手を受けた。

「茉莉・白根シラネです。来月で十六になります」

手を離すとマリーは表情を明るくして両手を合わせる。

「マリ、ね。名前が似てるなんて素敵！ 歳も近いのね。ねえ、マリ、お昼はどうするの？ よかったらここで食べていけない？ 隣のホールでなんだけど」

「えっと……」

正直あまり長居はしたくないと思うが、はつきりと断れないのは母国民の性である。

「今日はちょうど持ち寄りの日なの。必ず持参しなきゃいけないわけじゃないから、もし時間に余裕があったらぜひ食べていって。わたしも作ってきたのよ。この国にきてどのくらい？ 家庭料理とか食べたことあるかしら」

家庭料理と聞いて茉莉は言葉につまった。実のところ、半年経ってもこの国の一般の人の手料理というものを食べたことがないのである。視線をさまよわせると、マリーの後ろを巨大なケーキが運ばれていくのを見てしまった。車のタイヤくらいはあるだろうか。つい目で追ってしまふ。それに気がついたマリーは、ああ、と頷いた。

「お菓子作りが趣味なご婦人がいらしてね」

「あ、あれで趣味？」

茉莉が口をぽかんと開けているとマリーは喉の奥でくつくつと笑った。

「そうよ。びっくりしちゃうわよね。あー、あれはりんごと紅茶のシブーストだわきつと。……で、どうする？」

礼拝堂からホールにつながる扉の向こうではにぎやかに食事の準備がされているようである。食欲をそそられる匂いに茉莉のお腹が音をたてた。

「……た、食べます」

頬に熱が集中するようで、茉莉は顔を手であおいだ。

促されてホールに向かうと、こどもたちが駆け寄ってきた。背格好はばらばらである。あつという間にマリーを取り囲み、抱きつく子もいれば少し離れてはにかんでいる子もいる。

「マリー！ おはよう！」

「おはようみんな」

「ねえマリー、何持ってきたの？」

「鶏のオレンジ紅茶煮よ。ニンジンのグラッセもあるから、みんなきちんと食べるように！」

うええ、と舌を出したり、目を輝かせたり反応はさまざまである。

「うちのママはほうれん草とプチトマトのキッシュだよ」

「あらおいしそう。……ジョルジュ、おはよう。どうしたの？」

もじもじしている男の子を手招いてマリーは頭を撫でる。

「あのね、えっと、あのね、ぼく、パパといっしょに紅茶クッキー焼いたの」

「ほんとう？　すごいじゃない。楽しみ。絶対食べるね」

マリー、マリー、と集まるこどもたちを、少し離れて茉莉はぼんやり眺める。

母国で別れてきた友人たちが「茉莉」と呼ぶ声を思い出して、口を真横に引き結んだ。

「すみませんね。マリーはあの子たちのお姉さんみたいなので」

声をかけられた方を向くとかっちりとしたベージュのジャケットが目に入る。

上を向くと赤毛の男性がほほ笑んでいた。



「いえ、こどもがいっぱいいるんですね。こどもだけじゃなくて若い方からお年寄りまで」

一度にいろいろな年齢層が集まるところを茉莉はあまり見たことがなかった。改めてみると不思議な光景である。

「そうですね。教会は地域コミュニティの一つでもありますから。いろいろな人がいますよ。年齢だけじゃなくて、生まれた国もさまざま。職業も本当に多様です。この国自体がそういう国なんですけれどね。申し遅れました。わたくしノボノ・テイローセと申します」

穏やかな物腰と隙のないピシッとした服装に茉莉の背筋も伸びてしまう。茉莉が名乗るとノボノはナッツ色の双眸を細めて笑った。

「日本の方ですか？ わたくしちよつとだけ日本語を勉強したことがあるんです。どんな字を書かれるんです？」

「あ、はい。白い根で白根、名前はジャスミンの……」

「ノボノ！ 何ナンパしてるのよ！」

マリーがずかずかとやってきてノボノの腕を叩く。こどもたちにもみくちゃに

されたようで少し息が上がっていた。

「ナンパとは人聞きの悪い。マリーがお客様をほっぽりだしていたからお相手していたのに」

「そ、それは悪かったわ。ごめんなさいマリー。そろそろ準備ができたようだから行きましょう」

通された先でテーブルに並べられた料理の数に茉莉は目を丸めた。三つある大きなテーブルにぎっしり色とりどりの食べ物が置かれている。スナック菓子やお店のパックに入ったデリもあれば、手作りらしいラザニア、カラフルな野菜のゼリー寄せ、生春巻きなんていうものもある。

「すごい……こんなたくさんみんなまで食べきれるのかな」

小さくつぶやくとノボノが大丈夫です、と目をきらりとさせた。

「独身一人暮らし組は空のタッパー持参ですので、余ったらわたくしたちの今晚の夕飯や明日の朝食になりますから！」

食事の感謝の祈りをした後、茉莉に取り皿とフォークを渡しながらノボノは力

説する。それを聞いていたマリ―はため息をついてぼそりとこぼした。

「たまには自分で作ってくればいいのに」

「あーあー、ええと、マダムドルチェのりんごと紅茶のシブーストはどこでしょうねえ」

あからさまに聞こえていないふりをして、ノボノはデザートを探しにふらふら行ってしまった。

「すぐああやってごまかすんだから。甘いものばかり食べて……。あ、マリ、あれが私のよ。鶏のオレンジ紅茶煮！」

「わあ、おいしそう。この国はお茶の料理が多いのね」

取り分けて口に頬張ると、オレンジの酸味の後に鶏のうまみが広がり、紅茶の香りがほんのり残る。どうやって作るのだろうと舌の奥で探ってみる。

食事をしながらもそれぞれ話したり、歌ったり、にぎやかである。時折話しかけてくる女の子やご婦人もいて、茉莉の頬もゆるむ。

「あのね、マリ―」

「うん？」

隣で手羽先と格闘していたマリーが茉莉の方を見る。

「わたし、こっちに越してきてからなかなか友達も作れなくて、自分の国がずっと恋しかったの。今でも恋しいんだけど。今回の宿題も先生が教会に行ってごらんさといってわたしだけに出したものでね、正直気乗りしなかったんだけど、今日来てよかったと思う」

学校の皆は茉莉を「マリー」と呼ぶ。その度に「わたしの名前はマリーじゃない」と思っていた。

黙って聞いていたマリーが茉莉の手を引いて飲み物の置いてあるテーブルに連れてきた。

「はい。ノボノが持ってきたの」

ガラスのカップを差し出して、丸いころんとしたものを入れる。そこにポットのお湯が注がれる。それまで固く閉じられていた黒い塊が芳香と共にゆっくりと開いてゆくのを茉莉は息を詰めて見つめた。

細工されたお茶の葉が開くと、赤い花が咲いた。わ、と思わず声がこぼれた。目を閉じて、すん、と湯気を吸い込む。爽やかな花の匂いが鼻孔を抜けた。

「マリ、あなたのお茶よ」

「……聞いてたの」

マリーの碧の眼がやわらかく弧を描く。恥ずかしさをごまかすようにグラスに視線を戻すと、薄紅の花が二段、三段と連なってゆらりと浮いてきていた。

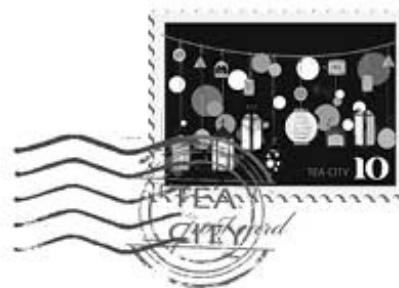
最後に空気の粒を乗せた白い茉莉花が咲く。小さな十字の花がみるみるうちに滲んでいった。





あの子が去っていくのを僕は見送ることし  
かできませんでした。

僕はまだ子供だから引き留めて、攫ってい  
くなんてできないから。



あの子に贈るフレーバティー、できました。

名前をもらって「メモリアル・リゼ」

ホームには入れないから、渡せないままお別れになると思ったんですが  
親方の愛娘のイングリッドお嬢様が、友達を見送るついでに僕のことこっそり  
駅舎に入れてくれました。

あの子は最後に僕にこう言いました。

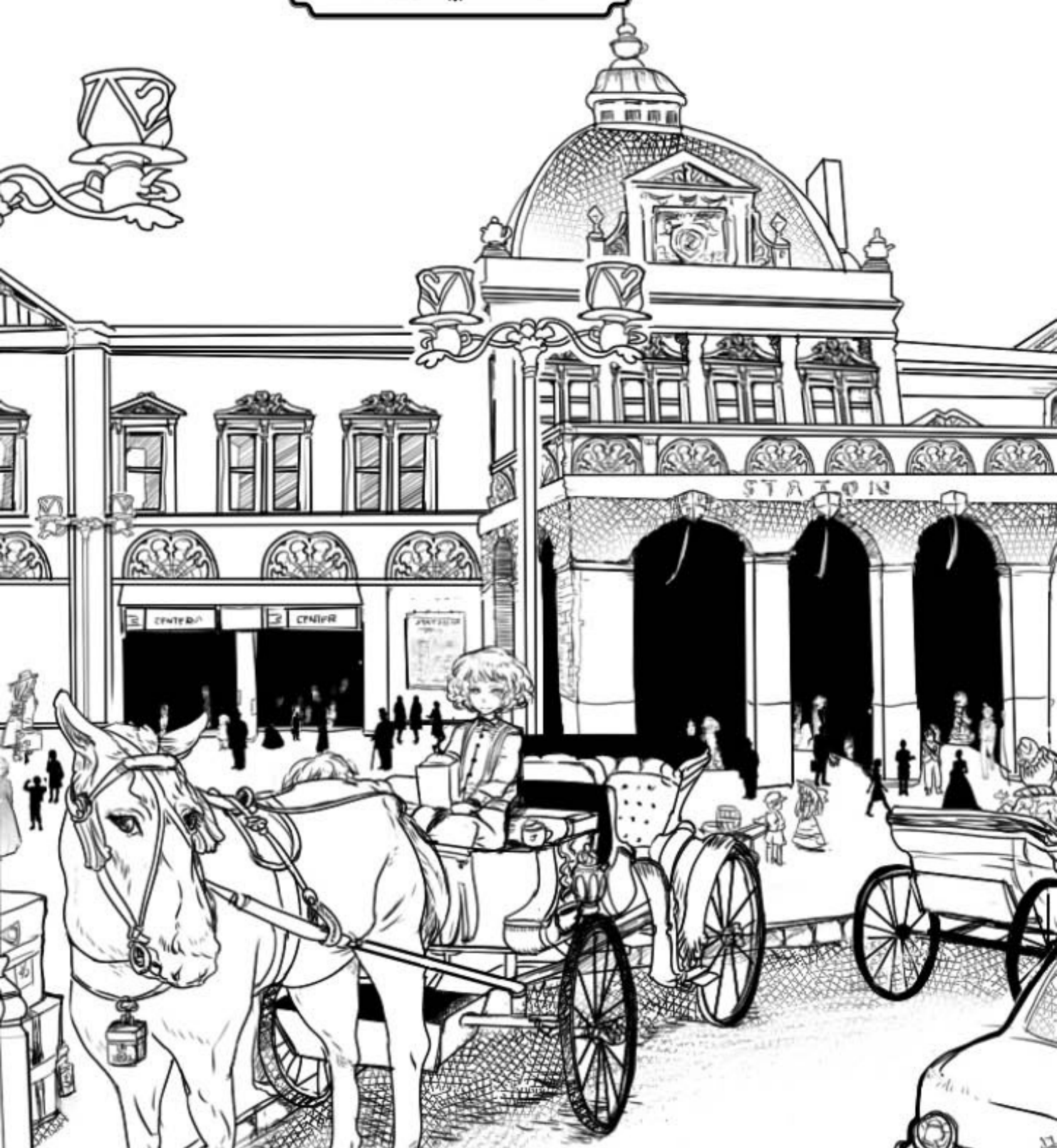
この街のことを忘れない、あなたのことを忘れない。この香りを忘れない。





グッバイ、ブルーバード

天都 しずる





水筒の中で紅茶がたぷんと揺れる。

真っ白な壁に彩られた駅舎の前に立つ。議場や観光客向けの商業施設をいくつも抱え込んだ駅舎は、すべらかな白い石を日差しで照り光らせ眩い光を放っていた。

どこの国から来たとも知れない変わった衣装を着た者達が、談笑しながら出入り口を通り過ぎていく。

東西の文化が入り乱れたこの街には、毎日多くの者達が列車に揺られてやって来ては去っていく。ユエもそのうちの一人だった。

三階建ての駅舎は高さよりも横幅がとにかく広い。その壁面を埋めるようにずらりと並ぶ馬車や人の群れを通り過ぎ、駅舎の中へと足を踏み入れた。

商業施設を抜けると白い壁が消え、プラットホームへと続く通路は光をふんだんに取り込むガラス張りの壁へと変わる。丸いアーチ上の天井を見上げると秋晴れの気持ちよい空が見える。

その通路を越えていくと、今度はガラスの天井さえもないぽっかりと開かれた空間に出る。プラットホームだ。

時計がさす時間は十三時ぴったり。列車の発車時刻を十分後に控えた刻限だった。

人でごった返す中をきよろきよろ見渡し、待ち合わせていた人を探す。

「ユエ！」

目当ての人を探す横から自分を呼ぶソプラノが響いた。

「イングリッド？」

ぱっと声のした方を向いたユエの前に、駅舎と同じ真っ白のワンピースとカーディガンを着たイングリッドが躍り出る。一目見ただけで裕福な家の出だと分かる小奇麗な姿が怒りをあらわにしているのを見てごめんと謝った。

「お客さんと話し込んでたら遅くなって」

「もうっ！ だからって列車に乗り遅れたら困るのはユエなんだから、しっかりしてよね」

イングリッドが怒るのも無理はない。彼女は今日他ならぬユエの見送りに来たのだ。だというのに当人が遅れては世話がない。

視界の端に、黒く艶々とした蒸気機関車が停車している。

早くも街を出ていく人を飲み込みながら発車を待つ列車を見て、イングリッドがしみじみ呟いた。

「ユエがお茶作りの修行でこの街に来てからもう三年も経つのね」  
「そうだね。気付いたらあつという間に三度目の秋が来ちゃった」

天井のない空を見上げる。秋晴れの、薄青い空に雲がたなびくのを眺めこの三年を思い返す。

三年前まで、ユエはティーレと呼ばれる宝石茶のマイスターを師と仰ぎ修行を積んでいた。そして師が出した最終試験を合格しこれからどう生きようか考えた時、自分も多くの人を笑顔にしたいと師のもとを離れ一人この街にやって来たのだ。

依頼人の願いを叶える奇跡のお茶ティーレ。

ユエのいた国では師一人しか作れないとされたその宝石茶を広め研鑽を積むために、あえて遠い地を選んだのは自分自身の意思だ。師もそんなユエを許し応援してくれていたし、今でも時折この遠い街に手紙が届いていた。

かぶっていたつば広の帽子を脱ぎイングリッドが肩を竦める。

「最初は奇跡なんて言われても胡散臭くて信じられなかった。いくら貴重なお茶がそこいらにあると言っても、ティーレなんて名前一度も聞いたことがなかったんですもの」

「イングリッドだけじゃないよ。皆最初は全然信じてくれなかった」

「そうね。だからユエが街にお店を開いた時も閑古鳥ばかり鳴いてたわ。私がお店に行ったのも冷やかしの程度の気持ちだった」

でも、と続ける。

「いつの間にかお店は大繁盛。あんなに誰もいなかったお店に人が溢れたのを見た時は思わず笑っちゃったわ。閉店する時皆がどれだけ落ち込んだか知ってる？もうティーレが飲めないって女の子達なんかすっかり気落ちしちゃったんだから。ユエのティーレ、この界限にいる女の子の願いを全部叶えちゃったんじゃないかしら」

たっぷりとした溜息が帽子へと落ちていく。

「本当に行くのね」

もう三ヶ月も前に話したことを今更のように言うイングリッドの言葉を受け

止め、うんと頷く。

「あまり長い間同じ場所にはかり滞在していたらティーレは広められないし、それに一度師匠に会っておきたいから」

この三年で新しいレシピをいくつか開発している。そのひとつひとつを味わってもらいたい。それに修行を積んでようやく師に顔を合わせる自信ができたというのも理由の一つだった。

スコップで石炭の山を掘る音がする。発車五分前のアナウンスを二人で聞いていると、くすりとイングリッドが笑う。

「初めて会った時から喧嘩ばかりだったわね、私達。全然素直になれなかった」

「イングリッドがすぐ突っかかるから」

「ユエだって喧嘩を買ってたんだから同罪よ」

「それはイングリッドがティーレを馬鹿にしたからじゃない」

ユエの言葉に確かにそれはそうだけだと小声が返される。

閑古鳥の鳴いていた店を冷やかしてティーレを馬鹿にしたイングリッドと壮絶な口喧嘩を繰り広げたのはいい思い出だ。

あれから毎日のように店に顔を出したイングリッドとは、確かに喧嘩ばかりしていた。

三年間を振り返り目を緩める。思えば、ティーレ作りと喧嘩ばかりした三年だった。

よくもまああれほど毎日喧嘩をして、言葉が尽きないものだ。と他の客に呆れられたものだ。それほど喧嘩の種はそこら中にあり、そして二人の喧嘩の数だけティーレは生まれた。怒鳴りすぎて疲れた後、彼女はいつもティーレを頼んだから。

その日々が終わってしまうのが寂しいのはユエも同じであった。

淋しげな顔に笑顔を向ける。

「でも今は友達。そうでしょう?」

イングリッドが大きく頷く。はちみつ色の髪がとろりと日差しに透けた。

「勿論よ。それに今はティーレの奇跡を信じているわ。奇跡が欲しいほど困ってなんかいなかったけれど、ユエのティーレはこのお茶屋さんでも味わえない不思議な味だったから」

いつも無言で飲んで帰っていただけだったイングリッドの素直な評価に、胸をくすぐったいものがこみ上げる。

そうだ、と持ってきた水筒を振る。

「そういえばお茶、持ってきたの」

たふんと水音が揺れる音にイングリッドが目を丸くした。

「なあに？　こんな時までお茶を淹れてきたの？」

「こんな時だからだよ。ほら、カップ持って」

呆れるイングリッドが両手にカップを持つ。

水筒の蓋を開け、零さないよう慎重に中身を注ぐ。

茶とも紅とも言いがたい透明感のある液体がカップの中に収まっていく。

まあ、とイングリッドが驚いた。

「これ、普通のお茶？」

「そう。私、普通のお茶だって淹れるの得意なんだから」

胸を張ってみせる。

奇跡と呼ばれていても、ティーレとてベースになるのはごくごく普通の茶葉だ。

その中に宝石の粉を混ぜ込むことで魔法になる。だからユエはベースとなる茶の淹れ方も師のもとで何度も練習していた。

今回使ったのは夏摘みのダーズリン。

紅茶のシヤンパンと讃えられる味が秋空の下さっぱりと自分達の別れを飾ってくれるだろうと信じたから。

ティーレ以外の茶を差し出されたのは初めてと言うイングリッドに頬を緩める。

「出会いに奇跡は必要だけど別れに奇跡はいらない。私達は会いたい時にいつだって会えるんだから」

だからティーレがなくてもいいの。そう言うイングリッドも納得したのか顔を綻ばせた。

「ええ、そうね。私達はまた必ず会える。願いを叶える奇跡がなくても、私達の意味だけで」

発車ベルが鳴る。そろそろ列車に乗り込まないと間に合わない。

カップを握り締めるイングリッドにじゃあ、と手を振る。



「待って！」

立ち止まったユエの手からイングリッドが水筒とカップを取り、ユエの分の茶を注ぐ。

首を傾げるユエに向けて彼女のカップが軽く上げられた。

「乾杯しましょう」

高らかな声に願われるままにカップを触れ合わせる。

「街で有名なおまじない、知らない？ こうやって乾杯した後列車の中で飲んだお茶は、これからの旅路を祝福してくれるの」

軽やかに笑い、イングリッドが今度こそ列車から一步離れる。と、その時彼女が突然あつと叫んだ。

「ユエー！ あれ！」

遙か上空を指し示す彼女の手を追い、ユエも感嘆の息を漏らした。

薄青い空を横切っていくあれは。

「——ブルーバード青い鳥」

うつくしいまでの青がユエの門出を祝福するように蒸気機関車の上を旋回する。

イングリッドが口を開けて笑った。

「あなたって普通のお茶も奇跡に変えちゃうのね、ユエ！ほら、お茶に青い鳥が映り込んでいるわ」

イングリッドの言う通り、なみなみと注がれた紅茶にくっきりと青い鳥が映っている。彼女はくるくると回る青い鳥を見下ろし、青へと色を変えた紅茶を一息に飲み干した。紅茶に溶けた青い鳥が彼女の喉を通り抜けていく。

「また会いましょう！いつか絶対そっちに行くわ！必ずよ！」

大きく手を振るイングリッドを置いて列車が動き出す。

緩やかな速度で発車した列車の入り口でユエも必死に手を振った。

「うん、待ってるから！」

その時は師に紹介できるだろう。遠い地でできた親友のことを。

潮風を絡めとりながら黒煙が空高くへと伸びていく。

背筋を伸ばし、これから思い出に変わる場所をユエはじっと見つめた。

家々の白い壁面の奥からちらちらと海が見える。

塩と砂が入り混じった風に頬を打たれながら、ユエはきらきらと日差しを浴びて

煌く海の上に青い鳥が飛んでいるのを見つけた。イングリッドの中へと消えたあの青を。

ユエも彼女と同じように空と青い鳥に色を変えた薄青の茶を飲み干した。

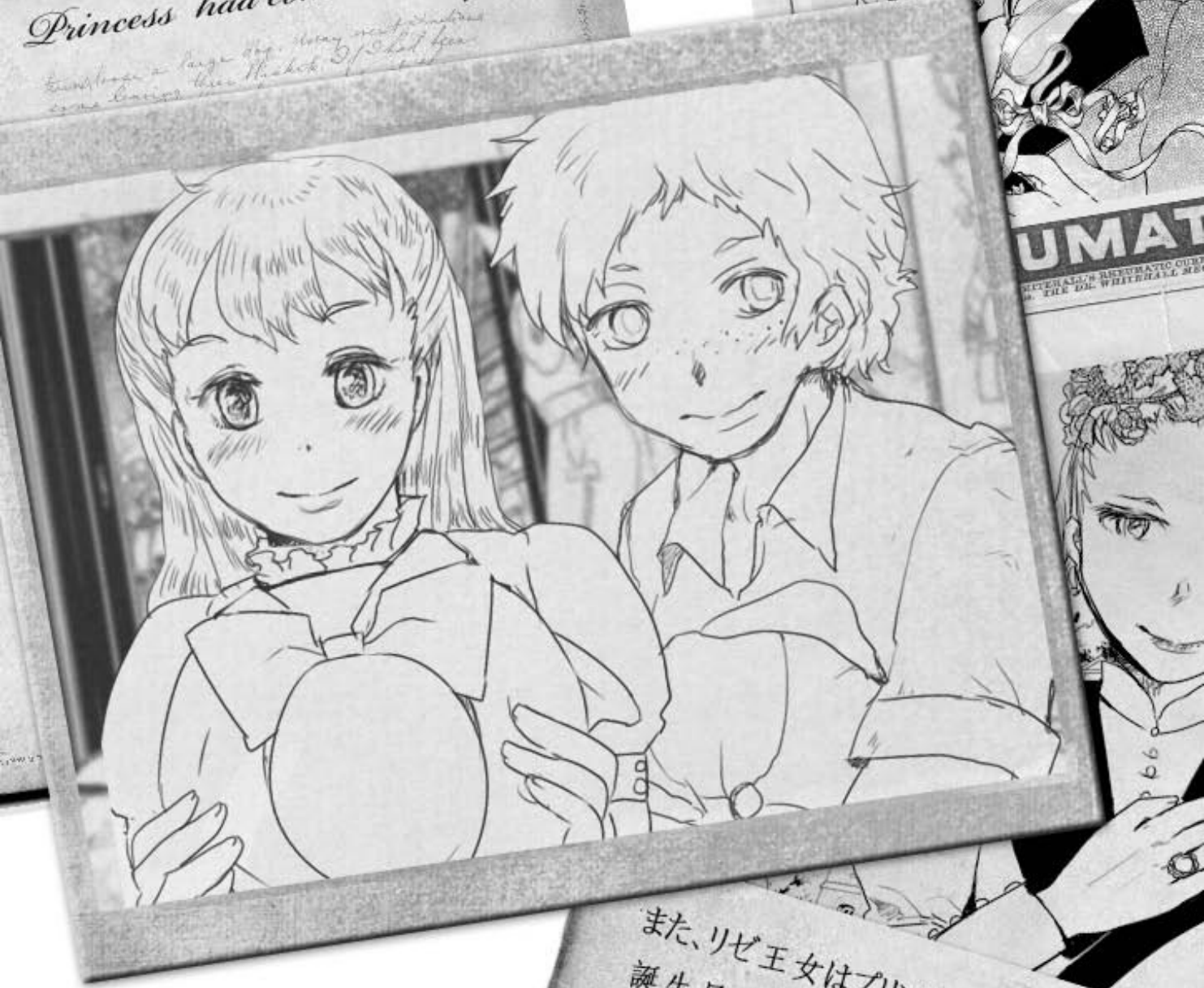
カップを置き、窓に身を乗り出す。

「ありがとう！さようなら！」

感謝を目一杯詰め込み秋の空を滑空する青い鳥に大きく手を振ると、小さな体軀が別れを惜しむように一度だけ旋回し、速度を上げて列車を追い越していく。

一際高く飛び立った姿がやがて空へと吸い込まれて消える。鮮やかな青の羽根が一枚、ひらりと潮風に乗ってユエが去った街へと戻っていった。





また、リゼ王女はプリンセスとして  
誕生日・結婚式前の最後のパケージョンを  
お茶都市で過ごされたことを発表された。  
国のお茶交易の中心を自由な  
結婚式の中継は  
義理



# お茶都市物語

創作クラスタお茶部 部誌 2

2012年11月1日 第一版

創作クラスタお茶部  
<http://nanos.jp/twiocha/>

発行・校正・編集

本文屏絵・DTP

椎名 恵

Tea Girl/Boy デザイン

霞ひのゆ (魔王様)

表紙

トダ姉

ARTIQUE



感想をお待ちしております。

twitter をご利用の方はぜひ

#創茶部 タグをつけて

ご意見ご感想を。

部員みんなで共有させていただきます。

※本書の転載・転用・商用利用の一切を禁止します。  
個人で楽しむ範囲での複製頒布はご自由にどうぞ。

